

2025年度学校評価（慶應義塾湘南藤沢中等部・高等部）

本校の 教育理念	<p>創立者福澤諭吉が唱えた「独立自尊」を教育理念とし、未来の先導者の育成を目指している。</p> <p>本校は中高一貫6年制の男女共学校として1992年に開校し、横浜初等部を含めた小中高一貫校として7年目を迎える。</p> <p>情操豊かで、創造力に富み、思いやりが深く、広い視野に立って物事を判断し、社会に貢献できる人、社会的責任を自覚し、知性・感性・体力にバランスのとれた教養人の育成を教育目標としている。</p>
本校の特色	<p>基礎を確実に身につける、きめ細かな指導を基本とし、開校以来、語学と情報リテラシー教育に力を注ぎ、「異文化交流」と「情報教育」を教育における大きな柱としている。</p> <p>本校では、帰国生が中等部では約20%、高等部では約25%という高い割合を占めており、異文化の交流が自然な形で学校の中で生まれている。</p> <p>二人担任制を導入し、きめ細かい生徒対応を目指している。</p>

2025年度総括

教科教育活動について

開校以来、各教科とも一貫校の特性を生かし、中等部は基礎的知識の習得、高等部では習得した知識を基に論理的思考や表現力を養う活動を行い、中高で継続的、発展的な教育内容になるよう配慮している。

2025年度は、昨年度と同様に、年度を通じて授業の実施・各学校行事において新型コロナウイルス感染症流行前の形で実施することができた。

本校中等部では、理科や情報・体育（中等部1年生）の授業をチームティーチングで実施している。それにより安全面に留意しつつ、生徒一人一人を大切にしたきめ細かな指導が行なわれた。特に実習の多い家庭科では、今年度より専属の補助員が採用され、実習の質向上につながった。4年数学は少人数教育により理解度を高める授業を実施して6年目となり学習効果の向上を実感できた。

昨年度より、高等部6年生のカリキュラムが新指導要領のカリキュラムに移行した。6年生での世界史探求が必修となり、5年時での世界史学習を継続して深い学びの機会となっている。6年倫理は週に1時間であったものが週に2時間に増え、哲学・宗教について多面的な理解が進んだ。5年数学Ⅱbではデータサイエンスの内容を強化し情報Ⅱの一部を必修とし数理的思考の育成を図った。また、各教科で、SDGsを意識的・積極的に授業に組み込むことは継続的に行なわれた。国語科では各学年においてSDGsの17の目標のうちいずれかの目標と関連づけられる内容を扱った。社会科2年地理分野では、世界へと目を向けてSDGsについて意識を深めた。

理科では、物理・化学分野で脱炭素化・クリーンエネルギー・資源リサイクルなどのトピックをとりあげた。生物・地学分野では1年で学校周辺の自然環境調査を通じ、地球環境の保全と利用について理解を深めた。3年ではマイクロプラスチックが及ぼす影響についてデータを用いた解説・実験を行った。

家庭科では、食糧自給率や資源の有効活用、地産地消、おもちゃ製作実習、ジェンダーや働き方、格差や経済、妊娠体験実習や高齢者疑似体験実習などの学習活動を通じてカリキュラム全体で、SDGsの17のゴールのすべてを1年生から6年生のカリキュラムで網羅している。間接的なSDGsの学習として、情報科では、タイピング入力練習のサンプルテキストをSDGsゴールにして読む機会としたり、英語科では、教科書の題材がSDGs関連の物が多く、生徒の意識を深めるのに役だっている。本校の教科教育活動は、学年、教科区分ではなく、総合的に融合的に展開されていることが再認識された。

委員会活動について

各委員会は、本校の教育目標が達成されるよう設置され、全ての教員が参画している。毎年各々が管轄する教育場面において生徒の安全や、教育効果を検証し評価している。

感染症予防の意識は継続しつつ、今年度は「通常」の活動が常態として定着した1年であったといえる。

今年度も、1～6年でコロナ禍以前の形で宿泊を伴う旅行を行なうことができた。各学年とも生徒の発達段階や旅行先の地理的・歴史的・自然科学的特徴に合わせた学習や体験をおこない、生徒の自発的な学びを得る機会となった。一方で食物アレルギーへの対応の件数が増えていることやインバウンドの増加に伴うオーバーツーリズムへの対応といった問題も生じている。

国際交流においては、シンガポール留学が再開した。また、多数ある短期プログラムの募集方法を工夫したことで、応募者が増加した。そうした中、引率者のサポートを充実させる必要性が指摘されている。

文化祭については、屋外企画や校舎内を利用した企画を設けることで、企画が多様化して集客が増え、生徒の満足度も高かった。第一体育館の飲食スペースでは店舗数や席数を増やし、集客力が強くなった。

芸術鑑賞会は中等部生・高等部生ともに神奈川フィルハーモニー管弦楽団演奏によるクラシック音楽鑑賞を実施し、情操教育の一助を担うことができた。

クラブ活動では、芹沢球技場の使用により、第一グラウンドの過密状況が緩和された。しかしグラウンド使用の過密常態による危険性が今年度も指摘されており、その解決は依然として課題である。夏季の暑さに対しては、炎天下での部活動の制限などの対策を実施した結果、熱中症での病院搬送は出なかった。教員の負荷軽減のために、書類のペーパーレス化や慶應義塾の「臨時職員制度」の活用をより促進したい。

広報活動に関しては、昨年度から再開された、在校生徒による生の学校紹介をおこなった。また、公募での生徒による学校紹介動画の活用も昨年同様おこなった。見学会はオンライン開催と、オンライン併用の対面開催を組み合わせて実施した。

本年度もいじめの重大事案は発生しなかったと認識しているが、疑わしい事案は散見した。いじめの兆候をより早く把握できるよう対策を講じている。昨年度開設されたwebで生徒が相談できる「いじめ相談フォーム」の生徒への周知をおこなった。一貫校いじめ問題連絡会を他校の取組みを知る機会とした。

三年目となった「未来の学校検討委員会」では、これまでの議論を踏まえ、テーマ別の議論をおこなった。5年先・10年先の本校を考え、新たな教育活動を提案・実施し、これからの新しいカリキュラム検討へつなげたい。

保護者からの評価について（学校関係者評価より）

2018年度より自己評価の客観性と透明性を高めることを目的とし、学校関係者評価を実施している。今年度も本校の保護者代表（代議員）35名に本校が実施している自己評価の方法や設置項目などに対する評価を行っていただいた。

事前にURLから学校評価報告書にアクセスしていただき、アンケートの設問に4段階評価で回答を求め、32名分を有効回答（回答者32×設問数7＝224）として集計を行った結果、A（十分）が79.0%、B（おおむね十分）が20.0%、C（やや不十分）が1.0%、D（不十分）が0%であった。

本アンケートは評価内容に対してではなく、評価の仕組みに対するものであり、貴重なフィードバックをいただくことができた。また、様々なバックグラウンドを持つ本校生徒に対する授業編成への理解、体験型教育導入への期待、本校教員の熱心な取り組みと多彩な教育活動に関する評価、本アンケートの評価方法について工夫を求める声も寄せられた。今後も教育内容および教育環境を細かく検証し、より一層の充実と改善に努めたい。

2025 年度 学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

1. 教科における自己評価

評価方法	<p>年度当初に各教科の学年、分野毎に授業担当教員が授業計画と目標設定を行い、資料を作成する。</p> <p>年度末に、授業計画の実施状況と、目標の達成度について授業担当教員が4段階で評価を行う。</p> <p>A 達成できた（80%～100%）／B ある程度達成できた（60%～79%）／C あまり達成できなかった（40%～59%）／D 達成できなかった（～39%）</p>
総合評価規定	<p>各教科の学年、分野毎の評価を集計し、以下の計算で算出されたものを総合評価とする。</p> <p>各分野と学年の評価を数字に換算 A→4 B→3 C→2 D→1</p> <p>その平均を総合評価点とし、下記基準でアルファベット4段階とする。</p> <p>A 達成できた（総合評価≧3.2）／B ある程度達成できた（総合評価≧2.4）／</p> <p>C あまり達成できなかった（総合評価≧1.6）／D 達成できなかった（総合評価<1.6）</p>

教科	目標と具体案	結果	次年度への課題と対策	中期的な課題	前回評価	今回評価
国語	<p>中等部では、正しい日本語の表記と基礎的な言語活動方法の習得を目指す。言語活動を通して社会の様々な側面に触れることで、人々や社会への関心のもと主体的に思考する土壌を形成することを目指す。</p> <p>高等部では文章を批判的に読解し、検証できるようになるための手法を学習する。生徒が自分で問題を発見し、解決する力を養うことを重視する。あわせて、論文を書くためのスキルの体得を目指す。</p> <p>中高問わず、授業での古典籍の使用、百人一首大会、能狂言鑑賞など、本物に触れることで日本の伝統文化に関する知識・教養を得ることに主眼を置いている。</p> <p>国語科は下記のゴールにしたがって、各学年で実践の形態を考えて教科指導を行う。「具体案」は右記「結果」に寄せることで示す。</p> <ol style="list-style-type: none"> あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる 飢餓を終わらせ、食糧安全保障および栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し生涯学習の機会を促進する ジェンダー平等を達成し、すべての女性および女児の能力強化を行う すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する 包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促進する 強靱（レジリエント）なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る 各国内および各国間の不平等を是正する 包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市および人間居住を実現する 持続可能な生産消費形態を確保する 気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる 持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する 陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、並びに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する 	<p>どの学年においても、授業内活動および課題を通し、生徒に幅広い言語体験を促すことができた。</p> <p>【全学年】 年間を通じた漢字テストの実施(4) 「読書ノート」等を通じた自主学習の促進(4)</p> <p>【1年】 漢字の成り立ちについて理解する（4） 小説の基本的な読み方を理解する（4） 古典の基本的な読み方を理解する（4） 日本の世界遺産の現状について考える（15） 俳句を鑑賞する（4） 日本の行事や風習について考える（4） 多岐にわたる分野の書籍を読み、かつ読書習慣を身につける（1・3・4・9・10・14・15）</p> <p>【2年】 あらゆるジャンルの本を読み、社会のいろいろな問題に目を向けるきっかけを作る（3・4） 宮沢賢治・柳田国男を通して、自然と人間の関わり方、経済社会とのバランスを考える（1・9・10・14・15） 社会の諸問題に目を向け、「いま考えるべきこと」を考え、その視点を広めるための投稿文を書く（4） 古典作品にふれ、それらと現代の文芸とのつながりを知る（4）</p> <p>【3年】 四国・広島修学旅行に先立つ学習 「平家物語」と軍記物語について 正岡子規の人生と俳論を通じて、革新の精神を知る 夏目漱石と『坊っちゃん』について 志怪小説 魯迅『故郷』 平安時代の文学と歌物語</p> <p>【4年】 詩の音読・群読（4） 小説の読解・鑑賞「羅生門」（4） 論説文の読解（3・4・10） 基礎レベルの論証およびクリティカルシンキング（4） レポート・論文にふさわしい書き方の習得（4） 世界の哲学・思想とその違いに関心を持つ（4）</p>	<p>一見関わりのないように思える国語科の営みが、SDGs と如何に繋がってき ていたか、如何に繋げていくかを、より深い所で考察し、共有しながら課程を進める。</p>	<p>言語体験の差および基礎知識の差にどのような対策を講じるか、引き続き検討と日々の工夫が必要である。</p>	A	A

	<p>17. 持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する</p>	<p>さまざまな思考法を知る (4) 自ら選んで教養を高める課題を通して、生涯学習の基盤をつくる (4) 古典鑑賞を通して日本の伝統文化を知り、自己理解・他者理解につながる基盤をつくる (1～17) 古典の鑑賞『伊勢物語』『小倉百人一首』さまざまな説話(4) 漢詩の鑑賞(4) 漢文に触れる 故事成語(4)</p> <p>【5年】 論説文の読解技術を知る。(3・4・10) 論説文の論理構造を把握する。(3・4・10) 論説文を要約する。(3・4・10) 論説文の論理を批評する。(3・4・10) レポート・論文にふさわしい書き方を習得する。(4) 読書を通し社会の様々な様相を知ること、自ら考える土壌をつくる。生涯学習の基盤をつくる。(1～17) 関心ある分野における先人の研究に触れ、自ら考える土壌をつくる。生涯学習の基盤をつくる。(1～17) 文学(芸術)的文章と実用的文章の違いに着眼する。(4) 文学作品における技術に着眼する。(4) 小説の技法を使った作品づくりをする。(4) 『枕草子』『源氏物語』を読み、平安時代の女房文学について考える。(4・5) 『史記』を読み、歴史上の人物の行動や心情について考える。(4・16) 人間の本性(性善説・性悪説)について書かれた文章を読み、今後の生き方を考える。(4・16) 季節ごとに吟行・句会を行い、季語を知り、俳句の可能性について考える。(3・4) 日本人の宗教観・倫理観について学ぶ。(4・16) 奈良・京都旅行に向け、作庭とその歴史について学ぶ。(4) 奈良・京都旅行に向け、ポスターを作成し、歴史や文化をより深く理解する。(4・9・11・15)</p> <p>【6年】 コント作りを通じて、言語文化や表現に関する見方・考え方を深めると同時に、笑いに関する概念的理解を構築する。(4) 近代作家の書簡について考える。(芥川龍之介書簡・北條民雄川端康成往復書簡等)(4) 北條民雄「いのちの初夜」の作品論を書簡として執筆する(4) 『古事記』を通して出雲・九州の風土と生活・文化を知ることによって日本の歴史を学ぶ(10) 「本居宣長」の考えを学ぶことで、教育の大切さを学ぶ(4) 古典籍を通して、日本に古くからある紙の役割と今後の紙資源の必要性を考える(9)</p>				
<p>社会</p>	<p>中等部では地理・歴史・公民の三分野にわたり、バランスよく基礎学力を習得することで、多角的かつ幅広く社会をとらえる視点を持つことを目標とする。また、物事を感情的に捉えるばかりでなく、知識を蓄えた上で論理的に解決するための力を養う。</p> <p>高等部では、社会問題に対して主体的に関心を持ち行動できるようになるために、基本的な知識を蓄えた上で、自己の考えを持ちつつ他者の意見を尊重する力、そしてそれらを他者と議論した上で、行動に移す力を養うことを目標とする。また、学部選択を見据えて各科目高度な専門的知識を習得するばかりでなく、習得した知識を用いてアウトプットできるようにプレゼンテーションや論述の機会を多く設ける。</p> <p>修学旅行や特別カリキュラムを通して史跡や企業・公的機関への見学を実施し、実際に自身の目で見ることにより、授業で習得した知識について考え、理解する機会を設ける。</p> <p>同じく、様々な業種の方々から直接話を伺うプログラムを実施し、将来的なキャリアに対する意識形成も目標とする。</p>	<p>中等部では、1年生で地理・歴史分野を学習した。基礎的な知識の定着を狙いとするが、教科に対する意欲や知的好奇心はあるものの、中学入試で社会を受験していない生徒を中心に知識定着には苦勞をしている印象があったため、グループ学習や統計資料を用いて思考力を深める授業展開も行った。また、希望者は三田にある慶應義塾史展示館を訪れ、体験的に歴史学習をおこなうことができた。</p> <p>2年生の地理分野では、1年生で学習した内容をより進め、世界へと目を向けてSDGsについても意識を深めつつ、日本地誌では調べ学習を中心に行った。公民分野では、国会・内閣・裁判所の統治機構を中心に学習した。</p> <p>3年生では、歴史・公民分野を学習した。歴史では史料の解釈など、物事の多角的な見方を身につけ、公民では、NIE学習を行いながら、政治・経済ともに日々更新される時事的な情報に常に触れることの重要性を理解できた。また、経済分野では「株式学習ゲーム」を取り入れ、実際の経済状況の変化と株価の連動を実体験することができた。</p> <p>高等部では、4年生で「地理総合」「歴史総合」を学習した。「地理総合」では、地理情報システム(GIS)を用いて情報を分析することで、視覚的・多角的に理解を深めることができた。「歴史総合」では、包括的でグローバルな視点での授業を実施することができた。</p> <p>5年生では、「世界史探究」を週1、「公共」を週2で学習した。「世界史探究」では6年次にも引き続き学習する事を見据えての授業展開を行った。「公共」は、18歳選挙権を意識した授業展開を行いつつ、将来の学部選択・職業選択を意識して実施している。</p> <p>6年生では、「世界史探究」と「倫理」を週2で学習し、文系選択者(Ⅰ類)は「地理探究」と「日本史探究」のいずれかを選択して学習している。「倫理」は、自分自身に焦点をあてて自らのアイデンティティについて考える授業と、それぞれの宗教の教義を中心に学習することによって、哲学的視点を身につけながら多面的に理解することができた。他にも、選択授業を通してより専門的な内容を学ぶことで、自らの考え方の幅を広げ、差し迫った学部選択に寄与することを意識して展開することができた。</p> <p>特別カリキュラムでは、日吉地下壕見学、租税教室・キャリア教育プログラムを実施し、机上では得られない経験をすることができ、実感を持って学習することができた。</p>	<p>中等部では、1・2年次に探究的学習を多く取り入れたが、比較的積極的に取り組む生徒が多かったため、続けたい。また、3年次に行った新聞を用いるNIE学習は、普段SNSを通して偏った情報ばかりに接している生徒が多い中で、広い視野と考え方を身に付ける上で非常に効果的であった。さらに自身の意見を持ちながら他者の意見を取り入れることの重要性にも気づくことができたので、続けていきたい。今後の課題としては、集めた情報の取捨選択をする力と論理的な思考力の育成も重視する必要がある。プレゼンテーションやレポート・論述問題により、その課題に取り組むたい。</p> <p>高等部では、引き続き大学における「研究活動」をターゲットとし、6年生「論文実習」の履修の前に、論理的思考力をより養い、客観的論述の訓練をすることが必要になる。論理的思考力を高めるためには、一定の知識も必要であるということ意識させ、知識の定着と思考力の育成の好循環を図れるようにする。そのためにも、幅広い書籍</p>	<p>初等部との連携の方法を模索しつつ、中高6年間のカリキュラムについて引き続き検討を行う。</p> <p>中等部においては帰国生などを中心とする基礎知識の未定着に対し、どのような対策を講じるべきか、「社会科」への興味関心を惹きつつ最低限必須とする項目の選定などの検討が必要である。</p> <p>「知識」の定着と「学問への入り口」への興味関心の喚起の両立が課題といえる。</p> <p>高等部については、知識でとどまらず、社会問題を主体的に捉えて解決していく人材を育てていくための経験的学習や探究的学習、そして専門的な学習が必要といえる。そのためにも、学校外の企業との連携や、日銀・東証への社会科見学等の継続的な実施も検討していく。</p>	<p>B</p>	<p>B</p>

			に触れ、必要な情報を収集する力と情報を取捨選択する判断力を磨く必要がある。			
数学	<p>中等部の代数分野では、3年間を通じて基礎的な計算力を確実に定着させるとともに、関数の概念を深く理解し、高校数学への確かな土台を築くことを目標とする。幾何・確率統計分野においては、数学の持つ美しさを発見するとともに、データを活用した問題発見・問題解決の力を養うことを重視する。また、中等部の1・2年生では、一人の教員が4時間の授業を担当し、継続的かつ体系的な指導を行う。</p> <p>高等部では、4・5年次において、全員が代数・幾何・解析・確率統計の基礎を学び、幅広い数学的知識を習得する。6年次では、進路に応じた専門性を高めるため、I類では経済学などの学習に必要な微積分・統計を重点的に学び、II類では理工学部・医学部・薬学部などの進学を視野に入れ、より高度な数学を探究する。</p> <p>I類・II類を問わず、数学を通じて論理的思考力を養い、客観的に物事を分析し、自らの考えを明確に説明できる力を育むことを目指す。また、データサイエンス教育を充実させ、デジタル社会における数理的な課題解決能力を備えた人材の育成にも力を入れる。</p>	<p>中等部 授業の冒頭に行う計算練習が定着し、効果的なウォーミングアップとなっている。これにより、生徒は自身の理解不足や計算ミスの傾向を把握しやすくなり、教員も個々の課題を適切に把握できる機会となっている。また、1・2年生では、2019年度より小教科に分けず、1人の教員が週4時間すべてを担当する体制を導入した。その結果、生徒の理解度や到達度をより詳細に把握できるようになり、個別指導の質の向上につながっている。また、課題の量を適切に調整できるようになり、試験科目数の削減による学習負担の軽減も見られている。</p> <p>高等部 十分な授業時間を確保することで、理工系学部への進学者はもちろん、文系学部を志望する生徒にとっても数学的思考力を養い、進学後に必要な基礎的な数学力を身につけることができている。内容が高度化する4・5年生では、これまでの教育レベルを維持しつつ、数学に興味を持つ生徒を増やすことを目指している。特に4年生の数学Iでは、1クラス約20名の少人数教育を導入し、今年度で6年目を迎えた。この取り組みにより、生徒一人ひとりとの距離が縮まり、各自の理解度や学習姿勢をより細かく把握できるようになっている。</p> <p>統計教育の充実 開校以来力を入れてきた統計教育においても、着実な成果が表れている。6年生の選択科目「データ解析」では、毎年統計関連のコンクールに参加し、引き続き入賞者を輩出している。また、文部科学省の学習指導要領改訂により、中学校段階で統計学の内容が増加したことを受け、5年数学IIbの記述統計学の多くが中等部へ移行した。これに伴い、2023年度からデータサイエンスの内容を強化し、情報IIの一部（重回帰分析・クラスター分析・決定木）を全員必修とした。これにより、データ活用の実践力を養い、現代社会で求められる数理的思考の育成を図っている。</p>	<p>5年数学IIbのデータサイエンスの内容については、2023年度実施状況を踏まえて取り扱う順番を変更した。2025年度については2023・2024年度の実績をもとに冊子化を行い、全員が取り扱う内容に追加して発展的な内容を充実させた。初等部2期生が本校の課程を終了した。現状では大きな問題はないものと認識しているが、これまでの本校での教育レベルを維持し、より数学に興味をもつ生徒が増えるよう努力していきたい。引き続き、IT機器の利用やアクティブラーニングの試験的な導入を積極的に進めていきたい。</p>	<p>新学習指導要領が求める「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、引き続き授業改善を推進する。また、数学的な活動を通じて、数学の世界と現実世界を行き来する学びを促し、生徒の学習意欲を一層高めるようカリキュラムマネジメントを強化していく。</p> <p>さらに、政府が掲げる「数理・AI・データサイエンス」人材の育成を意識し、数学教育の観点からDX社会で活躍できる人材の育成を推進する。</p>	B	A
理科	<p>基礎知識の習得に加え、観察・実験の体験を通して論理的に考える「科学的な視点」を身につけることを目標とする。</p> <p>中等部では、恵まれた自然環境・設備の中で数多くの観察・実験を行っている。キャンパス内の植物の観察や7つの理科室での実験を通じて本物に触れ、自然の事象や現象についての理解を深め、法則性を見出すことを目標としている。また、1年生においては、本年も継続して少人数教育を実施する。</p> <p>高等部では、教養としての科学と位置づけ、物理・化学・生物・地学のすべての領域の科目を必修とし、また、生徒の興味や進路希望に柔軟に応えられるよう、選択科目を設置している。観察・実験を通じて、自分の言葉で結果・考察をまとめてレポートを作成し、理論の理解を深めることを目標としている。また最新のトピックに触れたり、大学や卒業生と連携することで高度な内容にも取り組むことを目指している。</p>	<p><総括> 中等部では、各学年に応じたやり方で実験や観察を多く取り入れる授業を展開し、生徒の理解を深めることができた。特に1年では、昨年に引き続き少人数教育を実施し、十分な成果が得られている。授業で取り組む課題の指導をきめ細やかにを行い、提出物などのフィードバックも比較的時間を空けることなくできるため、生徒によって異なる理解度・習熟度を把握しやすくなり、生徒達もすぐに自分の課題への取り組み方を見直すことができるようになった。校外学習として、1年は新江ノ島水族館、2年は日本科学未来館、3年は国立科学博物館の見学を行った。</p> <p>高等部では、講義と実験をバランスよく実施し、基礎的な理論を理解させた上で、実験手法などの定着をはかることができた。また、観察・実験で得たデータを基に授業を展開するようにも努め、論理的思考力を育成するため文章で答えさせる（書かせる）機会を度々設けた授業もあった。論理的な文章表現力が必要な課題を繰り返し行うことで、論理的な文章表現力を身につけることができる生徒も多かったように感じる。また、4年次に実施している北陸修学旅行に関する学習として、地学の観点での事前・事後学習を取り入れ、現地での学びと合わせ一定の効果が得られた。</p> <p><SDGsを見据えた取り組み> エネルギーや資源の利用に関わるものとして、脱炭素化、クリーンエネルギー、資源リサイクルなどのトピックを取り上げ、実験後の廃液処理について、その意義を理解させるなど今後のあり方を考察した。1年次には学校周辺の自然環境調査を実施し、そのデータ分析などを通じて、地球環境の保全と利用について理解を深めた。3年次では、陸域から海洋へのプラスチック流出のメカニズムやその影響について理解するため、水域のプラスチックが紫外線を受けて微細化し、マイクロプラスチックとなるメカニズムや、マイクロプラスチックが生態系や人間社会に及ぼしている影響について、具体的なデータを用いて解説・実験を行った。</p>	<p>中等部では、1年生のみ週4時間（1分野・2分野）の少人数教育を引き続き実施していく。よりよい形の授業スタイルを模索しながら、高等部でのより深い学びにつながるカリキュラム作りを固めていく。一方、2年生以降は少人数教育ではなくなるが、引き続き細やかな指導ができるよう、授業スタイルおよび課題のフィードバックのよりよい方法を構築していく。高等部では、昨年度に引き続き初等部からの一貫教育、本校中等部での成果を活かした授業を実践したい。物化生地4領域すべての基礎科目を必修としたことで、自然科学の基礎をすべての生徒にむらなく身につけさせ、多様な進路選択を後押しできるようなカリキュラムを展開したい。</p>	<p>中等部では、引き続き、初等部からの一貫教育を活かした授業展開を目指す。初等部出身の者、海外の学校出身のため入学前に理科を学んでいない者、入試のため理科を深く学んできた者など、バックグラウンドの異なる多様な生徒を1つのクラスとして授業を展開する上で、知識量の差や、実験・観察に必要な技術習熟の差をいかに補っていくかが、大きな課題となっている。1年生については2019年度より継続している少人数教育の特性を活かして、個々人へのきめ細やかな指導を行うにあたり、より効果的な手法を模索していきたい。</p> <p>高等部では、大半の生徒が中高6年間の理科を一貫して本校で学ぶことを踏まえ、各学年で積み上げるべき基礎をより明確化し、大学進学時での学習内容の理解度を高められるような教育実践をはかりたい。また、高等部からの入学者がスムーズに中等部出身者に合流できるように配慮していきたい。</p>	A	A

<p>音楽</p>	<p>中等部は基本的な力を養うことに重点をおき、指導する。基礎的な音楽理論および音楽の歴史について学習し、音楽への理解を深める。また演奏や鑑賞を通して、音楽活動をする楽しさを感じることを目的とする。</p> <p>高等部では、より専門的な音楽の理解を深めるよう促す。作曲などを通して、より深く音楽理論を理解できるようにする。また打楽器やギターの演奏、西洋音楽史などを通して音楽の本質に触れることを目的とする。</p>	<p>実技の分野で1年生と2年生はリコーダーを行うことにより、音程感覚や楽譜の読み方の基礎を養うことができた。</p> <p>歌唱では、中等部生は3月の合唱コンクールのため、しっかり声を出して歌うことができた。しかし、音楽的な表現の工夫があまりできていない学年が多かったため、これは来年度以降の課題としたい。</p> <p>高等部の歌唱ではイタリア歌曲・ドイツ歌曲のレッスンや声楽のアンサンブル、合唱を行うことができた。体をしっかり使って声を出すことや、合唱の基礎的な指導に時間をかけて指導した。歌唱を通じて、音楽をする楽しさや、喜びを感じることができた生徒は多く、一定の成果が見られた。</p> <p>音楽理論の学習に関しては、中等部、高等部ともに、音楽理論の学習がなかなか進まなかったり、学習したことが定着しづらいという現状がある。家庭学習の習慣を身につけさせるよう、工夫する必要があると感じている。</p> <p>中等部 1年(6クラス) 週2時間 歌唱、リコーダー、音楽鑑賞、音楽理論 2年(6クラス) 週2時間 歌唱、リコーダー、音楽鑑賞、音楽理論 3年(6クラス) 週1時間 歌唱、音楽鑑賞、音楽理論</p> <p>高等部 4年(6クラス/音楽選択者のみ) 週2時間 4月～9月 歌唱、音楽鑑賞、音楽理論 10月～3月 ギター 5年(6クラス/音楽選択者のみ) 週2時間 歌唱、打楽器アンサンブル、音楽鑑賞、作曲</p>	<p>来年度は、中等部がリコーダーを使った授業ができる予定である。音程感覚を身につけることを意識して授業を行う。</p> <p>また、歌唱では発声の基礎を身につけると共に、歌詞を理解して表現を工夫したり、情景を思い浮かべて演奏したりできるよう、表現の幅を広げることができるよう指導をしていきたい。</p> <p>音楽理論については、学習習慣を身につけさせ、音楽理論について、しっかり理解できるようにすると共に、学習した音楽理論を演奏に生かすことができるよう指導する。</p>	<p>音楽理論や音楽史などがより深い表現活動を行うために必要なことであるという理解を、学ぶ姿勢を作る必要がある。音楽理論の学習が実技に生かされると実感できるような授業を工夫する。</p> <p>表現・理論・鑑賞の各領域のバランスの取れた編成を考える必要がある。</p>	<p>B</p>	<p>B</p>
<p>美術</p>	<p>身近な物や風景をモチーフとし、絵画や塑像の基本的な制作技術、またそれに伴う観察力の成長を促す。また与えられたテーマから自由に発想し、そのイメージを作品として成立させる能力を養う。</p> <p>中等部段階では、身近な物をモチーフとすることで現実と思ひ込みのギャップを理解させ、観察することの重要性を認識させる。また経験のある素材や技法を中心に使用することにより、基礎的な技術の向上と表現の幅を広げる。</p> <p>高等部では専門的な素材を使用し美術の知識を深めながら作品の成立を目指す。年代に応じて技術や素材を発展させ幅広い経験を得ながら、豊かなイメージ力と観察による再現能力を養う。</p> <p>全学年を通し、個性を尊重し多様な作品が並ぶことを目標とし、生徒同士がお互いの作品を鑑賞し個性を認め合える環境を整える。</p>	<p>観察を主眼に課題を制作しているため、個人制作が中心となっている。個々の作品制作に取り組むことで、計画的に作業を行い完成を目指す</p> <p>個々の能力に応じた指導を行いながら、集中して取り組むことが出来る環境を整えられている。授業内容は以下の通り。</p> <p>中等部 1年(6クラス) 1期 塑像(手) 2期前半 版画(顔) 2期後半・3期 水彩(風景) 2年(6クラス) 1期 スクラッチ 2期 平面構成 3期 素描(靴) 3年(6クラス) 1期 模写 2期 静物画 3期 塑像(顔)</p> <p>高等部 4年(3クラス) 1、2学期 油彩/陶芸 3期 石膏デッサン 5年(3クラス) 1、2学期 スクリーンプリント/陶芸 3期 細密デッサン *高等部の1、2学期は学期ごとに入替制を取ってる。 6年(選択授業) 陶芸上級 絵画上級(古典技法)</p> <p>中等部では、複数回利用している素材、特に塑像や水彩は顕著に技術の向上がみられた。また観察という点においても注意深く観察し形態の比較をしながら作品に反映させる力や、現実の距離感を平面上に置き換える空間把握の能力の向上がみられている。高等部では新しい素材の利用を通し、幅のある体験をさせることが出来た。素材のコントロールに苦労はしながらも、今までの経験を生かしながら素材の特徴を考え作品を完成させていく臨機応変に対応できる能力に成長を感じた。</p> <p>陶芸では毎年大量の削りカスや失敗した粘土が出るが、本校は大型の鑿岩機1台、大型ドレン機2台を有しており、ほぼ100パーセントの再利用ができています。また絵具を使用する課題では、無駄が出ないように再利用や保存方法を工夫している。</p>	<p>生徒に課題の目的を明確に伝え、個人制作に取り組む集中力の向上と課題への理解を深める。またその環境を整える。</p> <p>失敗や思うように形に出来ないことを体験させ、それを克服するための課題や対策を考える姿勢を促す。</p> <p>課題の検討を始める。</p>	<p>年々変化していく生徒の状況に合わせて、今後の数年間の取り組みとして課題を再検討していく。</p>	<p>B</p>	<p>B</p>
<p>体育</p>	<p>体を動かす喜びを体験させ、生涯にわたって運動に親しみ取り組みきっかけとし、社会生活を営む為の基礎作りを目指す。</p> <p>基礎体力の強化に加え、体のバランスや調整力を養う運動も取り入れる。</p> <p>安全に対する知識・行動・判断力をつけ、周囲への配慮もできるよう、道徳教育的側面も意識しながら集団の中での態度、姿勢についても指導し、バランスのとれた教養人育成に教科として貢献する。</p>	<p>今年度も全ての授業を対面で展開することが出来た。引き続き、中高共に安全面、インフルエンザ・コロナ感染予防対策を最優先に、さらに5・6・7・9月は熱中症対策を考慮しながら授業を実施。また9月の気温上昇にともない、9月2週目(2学期1週目)まで、全学年で水泳授業を行った。運動を楽しむために必要な基礎技術習得を意識し、体力向上にも重点を置き、また最終段階でゲーム形式の授業も展開することが出来た。</p> <p>5年体育実技 ○週2時間の運動は、技術の定着が難しく、基礎体力の持続に留まった。 しかしながら、5年生ということもあり、授業内容の理解が早く、円滑に進めることができた。</p> <p>4年保健 ○現代社会と健康(健康の考え方と成り立ち、運動と健康、食事と健康、休養・睡眠と健康、喫煙と健康、飲酒と健康、薬物乱用と健康、精神疾患の特徴、精神疾患からの回復、健康に関する意思決定・行動選択、健康に関する環境づくり) ○安全な社会生活(事故の現状と発生要因、安全な社会の形成、交通における安全) 特に一次救命の応急手当ての中から、包帯法を中心に行い、関連させて防災教育を主体的に行う。</p> <p>5年保健 2023度より現役の医師が5年全クラスの授業を行い、健康を保つことの大切さ、生涯を通じて重要な土台となることを、より深く、さらに自分のこととして捉えられるよう授業を展開することが出来た。</p>	<p>安全性を確保し、感染予防、熱中症対策を継続しながらも、教育効果の高い授業内容を検討し、それらを、主体的に実践出来る生徒育成が課題である。</p>	<p>引き続き減単となった5年生の実技についてはどのように授業を展開していくべきか検討していきたい。</p> <p>さらに運動における競争や協働を通じて、互いに協力し、公正に取り組む姿勢を養って行きたい。</p>	<p>B</p>	<p>B</p>

		<p>○現代社会と健康：私たちの健康のすがた、生活習慣病の予防と回復、がんの原因と予防、がんの治療と回復、精神疾患の予防、現代の感染症、感染症の予防、性感染症・エイズとその予防</p> <p>○生涯を通じる健康：ライフステージと健康、思春期と健康、性意識と性行動の選択、妊娠・出産と健康、避妊法と人工妊娠中絶、結婚生活と健康、中高年期と健康、働くことと健康、労働災害と健康、健康的な職業生活</p> <p>○健康を支える環境づくり：大気汚染と健康、水質汚濁・土壌汚染と健康、環境と健康にかかわる対策、ごみの処理</p>				
技術	<p>実践的・体験的な学習を通じ、知識と技術を習得させ、生活する能力と実践的な態度を育てる。1年生では、情報に関する内容、2年生では、加工分野のうち製図・木材加工を、3年生では、エネルギー変換の分野で電気について、加工分野では金属などを扱っていく。</p>	<p>1年生</p> <p>1学期 パソコン入門</p> <p>2学期 情報モラル、プログラミング入門</p> <p>3学期 プログラミングでクイズを作ろう</p> <p>春休み 栽培学習（豆苗の育成方法）</p> <p>2年生</p> <p>1学期 製図学習</p> <p>2学期 木材の加工・木材の加工2</p> <p>3学期 同上</p> <p>春休み 3DCAD で設計</p> <p>3年生</p> <p>1学期 電気分野（エコキューブラジオの製作）</p> <p>夏休み 機械学習（からくりおもちゃの製作）</p> <p>2学期 金属の加工（金属板の加工、オリジナルキーホルダーの製作）</p> <p>3学期 エネルギー問題</p>	<p>長年使用してきた工具の点検、入れ替え（少しずつ実施中）</p>	<p>作品保管場所の確保に苦勞して、取り組むことが出来る教材に制限が出ている。今後改善されると、より幅広い学習内容に取り組みるので、検討していきたい。今後の情報分野の拡大に伴う、加工機材の導入を検討していく。</p>	A	A
家庭	<p>中等部では生活に関わる基本的な知識・技術の習得をめざす。栄養や衣服の素材、管理のしかた、子供の成長と発達、住環境の整え方などについて学び、調理実習や被服製作実習など実践的な実習を行う。</p> <p>高等部ではさらに資源やエネルギーの効率的な利用について考え、持続可能性を意識した生活ができることをめざす。また、子供や高齢者など様々な世代の人々についての理解を深めることを目指し、妊婦体験実習や高齢者疑似体験実習などを行う。学んだことを実生活へ生かせるように考えるグループワークなどを行う。</p>	<p>今年度も概ね予定通りに授業や実習などを実施できた。2年生の被服製作実習は実習期間のみ補助が入る形にとどまってはいるが、今年度から家庭科専属の補助員を採用でき、1、3、4年生の調理実習の補助もしてもらえた。生徒のためにも最低限、安全は確保できるようにしたい。実技指導のためにも TT を再導入したい。</p> <p>家庭科では従来から SDGs を意識した教育を行ってきた。1、4年生では食料自給率や資源の有効活用、地産地消などを食生活分野と併せて積極的に扱っており、ゴール2、6、7、9、10、11、12、13、14、15、17に根ざした教育を行った。3、5年生では消費生活を取り扱うことにより、特にゴール12のつくる責任・つかう責任について考え、また、5年生のおもちゃ製作実習は家庭にある不要品を用いることにより、持続可能な社会作りに直結する総合的な取り組みとなっていた。高等部の授業ではジェンダーや働き方、格差や経済についてもグローバルな視点で扱い、ゴール1、2、3、4、5、6、8、9、10、12、16、17に根ざした教育を行った。5、6年生では、妊婦体験実習・高齢者疑似体験実習により、他者への関心や理解、思いやりを育み、パートナーシップを身につけ、よりよい社会の構築に役立つ人材作りに貢献している。3、6年生では住生活分野で、住み続けられるまちづくりについて考えさせる内容に加えて、今後起こりうる災害とその対策についてグループワークを中心として学習し、災害について実践的に考え、対策をしていくための態度を身につけさせた。</p> <p>今年度からコンポストを導入し、調理実習で出た生ゴミを堆肥化し、校内の植栽や畑の肥料として利用できるようにした。この数年、食材調達に苦慮していたが、監理室、事務室の協力を得て、近隣のスーパーに注文し、購入できるようになった。</p>	<p>被服製作実習を行う2年生の授業のTTを復活させたい。この分野でのTTは教育面・安全面ともに効果が絶大である。</p> <p>今年度から家庭科専属の補助員を確保でき、調理実習の準備、補助にも入ってもらえた。被服製作、調理の両方で、実習の質を向上させられた。これからは家庭科専属の人材を確保し続けたい。</p> <p>被服室前の掲示板が書道用に利用されているが、家庭科の実習授業中に掲示作業が行われることがあり、危険性を感じる。書道作品用の掲示板を別の場所に設けたうえで、ビニールカバーを外して被服室用に利用させていただきたい。</p>	<p>被服室が実習をするには狭く、アイロン作業は廊下で行わざるを得ないのが悩みである。</p> <p>備品の破損、不足、老朽化が目立ってきたので、購入、修理するなど対応を進めたい。</p> <p>被服製作実習のTTは教育面・安全面ともに効果が絶大なので実施できる道を探り、一日も早く実現させたい。</p>	A	B
情報	<p>中等部2年生では、基本的なコンピュータの使い方(タイピング、文書作成、表計算、プレゼンテーションの資料作成)、クラウドを利用した課題確認・提出作業、プレゼンテーションなどを通して、発表のスキルの習得、表計算を用いてアンケート調査や世間のデータで、データの整理や分析を行う。3年生では、プログラミング教材キット(SPIKEプライム)を利用したプログラミングを通して、センサーの仕組みや身の回りにあるプログラムによって制御されているものに興味を持たせた後、言語によるプログラミングにも取り組む。プログラミング体験時には、フローチャートを書くことで、順序・手順を考えながら作業を行う大切さを理解させる。</p> <p>高等部4年生では、各自が企画から撮影、編集まで実施するCM制作や、企画から、文章作成、写真撮影、編集、校正まで実施する雑誌記事制作を通して、物事を表現する手法の幅を広げるとともに、物事を発信する力、人に伝わるものの作成方法を身に付けさせる。さらに「学問のすすめ×AI」をテーマに、AIへの指示を考えたり、生徒が考えた指示文を教員がAIに代理投稿をして生成されたものについて議論する機会を設けた。5年生では、プログラミング作業を通じて、論理的思考を養い、そして情報のデジタル化、情報デザイン、知的財産、著作権、個人情報、ビッグデータなどをキーワードとしながら、情報化が社会に及ぼす影響について理解を深める。</p> <p>情報モラルについては、中等部・高等部ともに状況や学齢に合わせて定期的に呼びかけ、考える機会を設ける。</p> <p>クラウドの利用に関しては、中等部・高等部ともに積極的に利用する。</p> <p>画像編集や動画編集などができるツールをBYODでも利用できる環境整備も行う。</p>	<p>「目標と具体案」に記載した教科の授業を通して身に付けさせたい事柄については、概ね学年に応じたスキル知識が身につけていると感じている。クラウド環境の利用や授業で得た知識を、他教科、委員会活動、クラブ活動、学級活動等で生徒たちが、積極的に上手に利用することができていた。</p> <p>中等部2年生全員が2週に1回のペースで取り組んでいる5分間文書入力サンプル文章に、SDGsの「持続可能な開発のための2030アジェンダ」を取り上げ、17の目標を読む機会を設けた。</p>	<p>入学してくる生徒の実態に合わせたカリキュラムを考えながら授業を行っていきたい。</p>	<p>発展し続けている情報技術・情報社会の実情、入学してくる生徒たちのICT活用スキルの実態に合わせて、内容を常に変えていく必要がある。</p> <p>校内でICT機器活用する環境(場所・施設・机・椅子など)にも目を向け、生徒がICT機器を用いやすい環境整備も行っていきたい。また、すでに導入済みの3Dプリンタや、今後導入予定のレーザーカッターなどデジタルファブリケーションの環境整備にも取り組みたい。</p>	A	A

<p>英語 (α)</p>	<p>Our overall aim is to graduate knowledgeable, responsible, confident and globally-minded communicators who are motivated to continue their English-learning journeys and to make a meaningful contribution to society.</p> <p>Specific aims for Writing and Grammar: Students will become proficient writers of both academic and creative essays, culminating in a 1600-2000 word research paper written in the 6th Year. Particular attention will be paid to academic writing conventions such as citations, referencing and the need to avoid plagiarism.</p> <p>Specific aims for Reading and Vocabulary: Students will improve their vocabulary knowledge and refine their reading skills by studying a variety of novels and non-fiction works typically read by students of the same age in English-speaking countries. Sixth year students will study Shakespeare.</p> <p>Specific aims for Speaking and Listening: Students will become confident English speakers. They will be able to make professional presentations and participate in debates on increasingly complex subjects. Sixth year students will participate in the Model United Nations, deepening their understanding of international issues.</p>	<p>ICT skills acquired by both teachers and students during the Covid-19 pandemic continue to be utilized in many English courses. Some examples include:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) Sending messages and setting tasks for individual students who have had to stay at home due to Covid-19 2) Asking students to upload recordings of speeches done at home during longer holiday periods 3) Using Google Docs to facilitate the editing and redrafting of essays <p>Content and Language Integrated Learning (CLIL) has always been a characteristic of the Alpha English curriculum at SFC Jr&Sr High, and as one of our central aims is to graduate globally-minded, responsible students, there has always been a focus on studying global issues in a way that encourages our students to think critically about the issues that they will face as members of Society 5.0. In recent years, the SDGs have proved to be a useful framework for this purpose, and the following are examples of work done by Alpha students that focuses on the SDGs:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) Year 1 SLWG. Speech topics focused on Goal 3 (Good Health and Well-Being), 4 (Quality of Education) and 13 (Climate Action). In addition, several TED Talks that focused on topics related to the SDGs were studied, e.g. the talk by UN Patron of the Oceans, Lewis Pugh, which focused on Goal 14 (Life Below Water). 2) Year 3 RV. Goals 16 (Peace, Justice and Strong Institutions), 5 (Gender Equality) 4 (Quality of Education) and 8 (Decent Work & Economic Growth) were addressed in the study of the novel <i>To Kill a Mockingbird</i> by Harper Lee. 3) Year 3 Alpha WG. Students write an Informative Essay focused on SDGs. 4) Year 4 SL. Students gave persuasive speeches in which they had to choose a problem that fell under the SDGs, propose a solution, and persuade their audience to take action on it. 5) Year 4 RV. Goals 16 (Peace Justice and Strong Institutions) were frequently discussed during our study of <i>Fahrenheit 451</i> by Ray Bradbury. 6) Year 6 MUN. Students play the role of UN ambassadors for the duration of the course. The SDGs are studied in detail, and students make presentations focusing on which of the Goals are most relevant to the countries they are representing. We also discuss the SDGs in the context of Japan, and students are asked to write short essays in which they discuss which Goals they feel Japan is doing well and not so well on. Finally, the course concludes with an in-school conference in which all members of Year 6 Alpha work together to write a mock UN resolution on a global topic of concern. This year the topic was <i>Universal Secondary Education for All</i>, and Goal 4 (Quality of Education) was a major focus of the day. 7) Year 6 Discussion and Debate elective class. Each debate is based on a theme, many of which are directly linked to the SDGs, with debaters often making reference to the SDGs in order to strengthen their arguments. Some examples include: Goal 1 (No Poverty) <i>THBT the government should give more medical and financial support to the elderly.</i> Goal 5 (Gender Equality) <i>THW make companies hire as many women as men.</i> Goal 7 (Affordable and Clean Energy) <i>THBT all cars should be changed to electric cars.</i> 8) Year 6 Beta RV. Students read <i>1984</i> by George Orwell and discussed dystopia and the future society, which is linked to Goal 16 (Peace, Justice, Strong Institutions) 9) Year 6 iRui Beta LS. Students make presentations based about Ethical Choices relating to SDGs. <p>As we find every year, the majority of graduating Alpha students have reached the desired level of English. This is confirmed by the results of external exams such as TOEFL and contests such as the Keio Academic Writing Contest and a variety of speech contests. In recent years, a growing number of students are enrolling in the PEARL, Double Degree and GIGA programs at Keio University, enabling them to further develop their foreign language skills.</p>	<p>The Alpha curriculum is under continuous review and we are constantly looking for new materials to enrich the learning experience of our students.</p> <p>Particular areas of focus for 2026-27 will be:</p> <ol style="list-style-type: none"> a) To focus on grammatical accuracy in the written work of the weaker Alpha students. b) To ensure that we continue to make the best use of ICT and online learning platforms to complement what takes place in school, whilst being aware of the challenges posed by technology "assisting" students with homework. c) To further raise awareness of the real-world issues that our students will face in the future. 	<p>The arrival of the first cohort of Keio Yokohama Shotobu students in 2019 brought with it a number of challenges and opportunities for the English department. We now feel we have successfully implemented a challenging and coherent curriculum at the junior high level that addresses the needs of our highly diverse student intake.</p> <p>The first cohort of Shotobu students moved up to senior high school in April 2022, so our medium-term aim is to ensure that an equally challenging and coherent curriculum is developed to suit their needs. To this end, Year 4 WG students completed a course survey in March 2023, the results of which confirmed that the course content follows on well from junior high school courses and addresses student needs well.</p> <p>The development of AI presents a number of challenges for English education. Students will be strongly dissuaded from using AI and translation applications for most in-class and homework tasks. However, it is acknowledged that AI will increasingly become part of students' lives, and ways to constructively incorporate the technology into the English curriculum will be explored. Due to the use of AI by students, grading is being weighted more for in-class assignments/exams and less for assignments completed at home.</p>	<p>A</p>	<p>A</p>
-------------------	---	--	--	---	----------	----------

<p style="text-align: center;">英語 ($\beta \cdot \gamma$)</p>	<p>中等部、高等部共に英語はコミュニケーションの道具であるという基本理念に基づき、英語での情報を理解する Receptive な言語能力と、また英語で自分の考えを発信していく Productive な言語能力をバランス良く育て、英語を実践的に使うことができる人を育てることを目標としている。6年修了時に英検準1級、CEFR B1 レベルの言語運用能力に到達することを旨とする。</p> <p>中等部では、3年間で文科省が定める文法事項に加えて、副教材である New Treasure で扱われている発展的な文法事項の学習も進め、さらに、学習した文法事項を発展的に用いた様々な実用的表現、基本的な語彙を身につけることを目標とする。3年次には偉人に関するグループプロジェクトや、身近な話題に関するプレゼンテーションを経験する。</p> <p>中等部入学時の多岐に渡る学習歴及び習熟度に応じてより効果的な授業を行うために、1年、2年では2クラス合同4分割 ($\alpha 1$クラス、$\beta 2$クラス、$\gamma 1$クラス)の授業展開とする。3年では2クラス合同3分割 ($\alpha 1$クラス、$\beta 2$クラス)の授業展開とする。</p> <p>高等部では英語で情報を発信していくことにさらに重点を置き、4年で Speech、5年で Speech、6年で Discussion や Presentation を実施している。英語のニュースを教材として扱うことで、できるだけ実践的な英語力を高められるように工夫している。英語で情報を読み取り、それらを土台として自分の意見を書いていく Academic Writing の能力を高める取り組みも行っている。</p>	<p>中等部では従来通り、副教材である New Treasure を用いて基礎的な英文法の学習を進めた。英作文ができることを目標に基本文の暗唱や文法問題のドリルを繰り返すことによって、基礎的な英語力がしっかり身につくよう、多様なトレーニングタスクを実施した。また、身近な様々なトピックに関して30～40語のオリジナルの英文を書けるようにトレーニングした。</p> <p>高等部ではより多様な状況における日常会話での英語、及びよりフォーマルでアカデミックな英語に触れ、Listening や Reading 能力の向上させることができた。また同時に Listening や Reading のタスクを通して得た情報に基づいて、数多くのテーマについてプレゼンテーションを行った。</p> <p>Reading の授業では、教科書のみならず、関連トピックの新聞記事や映像教材を使用し、一般的な教科書には出てこないような実用的な英語表現に触れたり、語彙力を強化し、社会問題に関する意識づけをすることができた。また、5,6年で行われる Academic Writing では、英語で他者の意見の要約を書く力や、他者の意見を取り入れながら、自分の意見を説得力ある形で表現していく力を養うことができた。</p> <p>SDGs を見据えた取り組みとしては、そもそも教科書の題材に SDGs に関するものが多く、生徒は常に SDGs を意識して英語学習を進めていると言える。</p> <p>英検や TOEFL などの資格・運用能力試験に特化した授業を行っているわけではないが、今年度5年生で Writing では英検準1級の Essay フォーマットを授業で扱う試みをした。ここ数年は、β の生徒も卒業時まで準1級を取得する生徒の割合は30%を超えるまでになっている。</p>	<p>日々の授業に関しては、日本人の教員と Native の教員が引き続き密に連携を取り、必要に応じてお互いに授業内容を補い合っており、学習内容の更なる定着を図っていく必要がある。</p> <p>中等部3年での β、γ の合流に関しては、大半の生徒にとっては特に問題が生じないことがわかったが、成績下位者に対するフォローアップの方法とタイミングを考えていく必要がある。また、高等部の授業に準備するためにも、「中学3年間の総まとめ」と「Self-study habit」を意識して指導していく。</p> <p>高等部では既習の語彙、文法事項を使って Speech、Debate、Discussion、Presentation、Academic writing などを行い、自分の意見を発信していく能力を高めることももちろん大切だが、意味を優先するあまりに生じる文法的誤りを、見過ごしたままにせず、文法的正確さを高めていくための取り組みを、本格的に行うこともまた重要である。前述の通り「英語はコミュニケーションの手段である」という基本理念に基づくが、「通じればいい」ではなく、大学、社会人になった時に高いレベルでのコミュニケーション能力を求められる本校生徒には、正確さ、より知的な英語運用能力を鍛えていきたい。</p> <p>ICT やオンライン学習プラットフォームは今後も活用していく。しかし、昨年より生徒が課題作成時にテクノロジーに依存する傾向が見え始めた。将来そうしたテクノロジーを有効に活用できるようになるためにも、中等教育段階での学習は、「ツールに頼って出来のよいものを作成する」ことがゴールではなく、「自分の頭で考え、間違いをしながら、言語運用能力を高めていく」ことを教える側と学ぶ側の共通認識として授業を展開していく。</p>	<p>家庭学習時間が不足している生徒への課題の出し方、予習復習の仕方、self-study habit をつけさせる工夫が必要だと思われる。</p> <p>副教材として使用している New Treasure シリーズを、1～4年で、より効果的に教材を活用する方法を引き続き考えていく必要がある。</p> <p>高等部の生徒については、ITP-TOEFL を毎年実施しているが、国際基準の英語能力テストである iBT TOEFL は、試験内容が ITP-TOEFL とは大きく異なっている。将来的には iBT TOEFL が要求する統合的言語スキルをさらに高めることができるように、高等部の英語カリキュラムを再構築していくことが求められる。</p> <p>New Treasure を使い始めて4年目という節目を迎えたので、中等部各学年の Can-do リストを作成し、藤沢中高独自の新しいカリキュラムと評価基準を打ち出す必要がある。</p>	<p style="text-align: center;">A A</p>
--	--	---	---	--	---

2025 年度学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

2. 各委員会における自己評価

評価方法	当該年度の始業までに、運営計画と、3～5項目の目標設定を行い、資料を作成する。 年度末に計画の実施状況と、各目標項目の達成度について各委員会の構成教員が、A～Dの4段階で評価する。						
総合評価 規定	目標項目における評価点の平均点を算出し、以下の基準でアルファベット表記をする。 A 達成できた（80%～100%）／B ある程度達成できた（60%～79%）／C あまり達成できなかった（40%～59%）／D 達成できなかった（～39%）						
委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前 回 評 価	今 回 評 価
生徒係	<ol style="list-style-type: none"> 気品の泉源・知徳の模範となる塾生の育成 自宅外通学者の生活指導 防災意識の向上・災害時に生徒自身が的確に対応できる知識の習得 交通安全意識の向上 防犯意識の向上・情報機器・スマートフォンの適切な活用法の習得 生徒の成長に合わせた保健講演会の実施 生徒の学校生活全般にわたる支援 	<ol style="list-style-type: none"> 生徒の公共交通機関利用時のマナー・規範意識を向上させる。 一人暮らしの会を実施し、各寮との連携をはかる。 防災訓練を実施（帰宅方面別の設定／地震火災を想定した訓練）する。 道徳・HRでの交通法規に関する周知、自転車通学者への個別の呼びかけを行う。 道徳・HRの時間を利用し、防犯教育や学年に応じたスマートフォン利用の仕方を徹底させる。 保健講演会を実施（精神保健・スポーツ障害など）する。 私物管理の徹底をはかる。 	<ol style="list-style-type: none"> 教員が年間複数回、湘南台駅および大学本館前にてバス乗車指導に取り組んだ。今年度は下校が集中した際の乗車マナーについて、苦情が多く寄せられた。 生活上の具体的な問題点や解決法などを上級生から下級生に情報提供する場を設けることができた。 帰宅方面別グループの確認を行った。また、防災訓練では通常授業の時間帯を想定したクラス・教室配置で実施し、安否確認の共有方法を確認した。昨年度変更した訓練をさらに改善させている。 道路交通法改正に伴い、HRで全体に、自転車通学者に対する交通ルールの遵守およびヘルメット着用について周知した。また、特別カリキュラムにおいて警察官による交通安全教室を実施した。 帰宅方面別グループの確認は防犯教育にもつながるものであった。スマートフォンやPCの利用については、依然として課題がある。 校医・カウンセラーなどによる講演会を複数回、実施した。 落とし物の展示を学期に1回のペースで実施した。 	<ol style="list-style-type: none"> 乗車マナー、待機時のマナーを周知し、円滑なバス・電車通学になるよう検討を続ける。 寮・学校間の連携を密にし、寮からの情報を生徒係・担任団と共有する。次年度も一人暮らしの会を実施する。 次年度も帰宅方面別グループ分け、災害時を想定した防災訓練を実施する。防災訓練では今年度の内容をさらに実践的なものに更新していく。 自転車通学者の交通ルール順守を徹底し、違反者をゼロとする。 必要に応じて警察にも協力を仰ぎ防犯教育を実施していく。中等部生・高等部生ともにスマートフォンを上手に活用できるように校内での利用について見直しを重ねる。 次年度も様々な形での講演会を検討したい。 次年度も生徒会と連携し、持ち主が現れなかった落とし物の処理方法を検討していく。 	<ol style="list-style-type: none"> 生徒がキャンパスと駅の間を快適に通学できるような輸送システムを確立する。 生徒の精神衛生面における支援のため、学校と家庭がより連携し生徒を見守る体制づくりを模索する。 より実践的な防災訓練の確立、および必要な防災備品を整理、準備する。 	B	B
いじめ 防止対策 推進室	<ol style="list-style-type: none"> いじめの未然防止のための措置を講じる いじめの早期発見のための措置を講じる いじめの早期解決のための措置を講じる 	<ol style="list-style-type: none"> 学校生活、友人関係にまつわる悩みなどのカウンセリング件数の増加に伴い、カウンセラーの相談時間枠の拡大に加え、電話やweb会議システムを用いた遠隔カウンセリングなどを通じて、いじめ防止のための対策を実施する。 学級活動、生徒会活動、道徳の授業やクラブ活動の場において、いじめについて生徒が主体的に考え行動する機会を設けるように努め、道徳性を育む取り組みを進める。 	<ol style="list-style-type: none"> 今年度もいじめを疑わせる事案は散見された。引き続き最大限の防止策を講じるとともに、いじめの兆候を早期にキャッチできるよう努めていく。 一貫教育校いじめ問題連絡会にて「いじめの重大事態の調査に関するガイドラインの改訂」や「いじめ発生時の対応フロー」について確認が行われた。 生徒がいじめに関する相談をwebを通じて行えるよう「いじめ相談フォーム」を開設し、HRで周知した。 	<ol style="list-style-type: none"> 中高併せて36クラスと学校規模は大きいですが、一人一人の生徒の様子を丁寧に観察する姿勢を堅持するとともに、いじめ事案が発生しなかったことに安心感を抱くことなく、緊張感を持続していくよう、教員集団に促していく。 一貫教育校いじめ問題連絡会で得られた他校の取り組みを参考にして、本校の取り組みを見直していく。 	いじめの形態は社会背景に影響を受けて変化することから、教職員が継続的に研修を行なう制度作りが求められる。また、教職員のコミュニケーションをより緊密にとれる体制を整えていく必要があると考えている。	A	A

		<p>3. 教職員は日常的にいじめの問題に触れ、「いじめは絶対に許されない行為である」という雰囲気を醸成するように努めるとともに、「いじめはどの学校でも、どの生徒にも起こりうる問題である」という認識の下、生徒の行動に目を配り、生徒との信頼関係の構築に努める。また、個人面談を実施するなど、生徒がいじめを訴えやすい体制を整える。</p> <p>4. 表面化しにくいインターネット上のいじめへの対応策として、情報モラルを身に付けさせる指導を継続的に行うと共に、保護者と緊密に連携・協力し、双方で指導を行う。</p> <p>5. 生徒がいじめを受けていると思われるときは、直ちに本推進室の会議を緊急開催して情報を共有するとともに対策を講じることにする。いじめを受けた生徒を守り、安心・安全な学校生活を送ることができるよう必要な支援を行う。いじめを受けた側、行なった側双方の生徒および保護者に対し、事実関係を速やかに伝え、適切な対応が行えるよう、保護者の協力を求めると共に、継続的な支援を行う。</p> <p>6. 一貫教育校いじめ問題連絡会に出席し、塾内一貫校との情報交換・意見交換を通じ、いじめの問題に対して、適切および迅速に取り組む体制を整える。</p>					
文化祭	<p>1. 文化祭の運営、管理をはじめ、規則の取り決め、出展企画の活動の統括を行う</p> <p>2. クラブ、クラス、有志、教員による各出展企画の、調整および支援を行う</p> <p>3. 文化祭作業および文化祭を通じ、生徒の文化活動の活性化と学内交流の深まりを目指す</p> <p>4. 生徒、教員からなる企画を行うことで、本校の校風、活動状況を内外へ紹介する</p> <p>5. 「文化の薫り」を基盤とした統一性のあるものを創り上げ、本校生徒や来場者に我が校の「薫り」を感じてもらおうことを目指す</p> <p>6. 安全と省資源、節電、ゴミの減量に対する配慮を心がける</p>	<p>1. 学校開催を想定して準備を開始する。システムの活用を検討し文化祭の充実と効率化を図る。</p> <p>2. 企画の多様化を図るため、外企画や校舎企画の追加。企画の具体的な内容をしめすとともに、企画立案時の発想サポート、校舎使用上の技術継承を目指す。</p> <p>3. 生徒の文化活動を活性化すべく、アカデミックな活動を行う有志企画の出展を補佐する。</p> <p>4. 文化祭担当教員と実行委員生徒は綿密な連携をとり、担当教員はこれまでの実行委員会のノウハウの伝達を、生徒はより活性化および合理化したシステムの構築を行う。</p> <p>5. 文化祭ウェブサイトと SNS を活用し告知を行う。</p>	<p>1. 2025 年度は、校舎を会場とした文化祭を開催した。全学年全クラス・文連クラブ・複数の教員企画・有志企画が出展した。</p> <p>2. 来場者数 11/8 (土) 来場者数：2,580 名 11/9 (日) 来場者数：3,908 名 入場者総数：6,488 名</p> <p>3. 企画について ・例年通り、15 分以内に収まる企画とした。 ・屋外の企画や校舎内を利用した企画を設け、企画の多様化を計った。集客も多く生徒の満足度は高かった。</p> <p>4. 飲食エリアについて 今年度から店舗を 3 店舗に増やした。大きな混乱もなくスムーズな運営が出来た。また集客数を増やすため、倉庫利用のスペースを縮小し席数を増やした。昨年より多くの集客が得られた。</p> <p>5. 文化祭 Web ページについて ・文化祭の告知として web および SNS を利用し、各企画の簡単な紹介および準備期間の写真や動画を配信した。公開期間は web・SNS 共に、2025 年 11 月末日までとした。</p>	<p>1. 過去の文化祭にならうのではなく、新しい文化祭を模索していく。</p> <p>2. 企画内容の多様化を図るため、アドバイスの方法を検討する。</p> <p>3. 企画に関わるメディアや表現媒体の再検討を行う。</p> <p>4. 校内案内を充実させ、円滑に校舎全域を周回できる方法を検討する。</p> <p>5. 本校文化祭が生徒のより一層の文化活動活性化を推進することを目指す。</p> <p>6. ゴミの分別の徹底と削減を目指す。</p> <p>7. 生徒の食事会場の利用状況の改善を図る。</p>	<p>1. 本校文化祭の目標を達成すべく、状況に応じた文化祭形態を考案する。</p> <p>2. 文化祭が、全校生徒の持つ創造力・表現力の素地へと働きかける機会となることを目標に、実行委員会の活動を補佐する。</p>	B	B

教務	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業や試験、学期末の特別日程などが円滑に行われるように事務処理を行う 2. カリキュラムに基づき、教科選択が適正に行われるように環境・手続きを整備し、実施する 3. 生徒の出欠席の状況を管理する 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業や試験の時間割・使用教室一覧などを作成する。 2. 次年度の6年生選択科目・5年生第2外国語の希望調査を行なう。 3. 次年度の6年生選択科目・第2外国語の本調査を行う。 4. 事務室と連携して、電子出席簿の運用を行う。 5. 教室の予約表や備品の管理を行なう。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 第2外国語は7月予備調査、1月本調査を実施した。 2. 雨天等でのバス遅延が多く、相変わらず生徒の登校時の負担が多い。 3. 教室のWeb予約システムは順調に稼働している。 4. 非常勤講師にも試験監督を依頼し、問題なく運用できている。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 南校舎の4年生は、机と椅子が相変わらず既存棟から持ち出したもののみである。体格に合ったものへの交換が望まれる。 2. 4年生に対しての第2外国語のガイダンスが引き続き手薄である。希望調査の前に、説明会の企画が課題である。また、7月予備調査の結果と1月本調査の結果が、大きく異なる結果となった。クラス編成のバランスを保つために、本調査を前倒しすることも検討する。 	<p>新カリキュラム（5年生からの第2外国語履修）が5年目となり、2回目の海外研修旅行も行われた。選択前に出口を紹介できるような工夫を提案していきたい。</p> <p>教室利用や試験実施、時間割作成などが円滑に運用できるように継続して努める。</p>	A	A
コンピュータ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 教員と生徒が利用するコンピュータ、タブレットとその周辺機器の管理及び整備 2. ネットワーク機器の管理及び整備 3. BYAD(中等部)の実施と次年度の機種選定、BYOD(高等部)の実施と次年度のスペック検討 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業や校務のオンライン化に必要なサービスを選定、契約するとともに、その利用方法を教員・生徒に周知する。 2. 教員用、生徒用パソコンのリプレースに関して、機種選定し、スケジュール通りに導入、置き換え作業を行い、9月以降の授業で利用開始できるようにする。 3. KIC/CSIRT等の塾内各部門と連携ながら、情報セキュリティに関わる最新情報を常に収集し、必要に応じて、技術的な対策を講じる。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 例年通り、ネットワークを安定して運用できた。在宅勤務や在宅学習の基盤としても、ネットワークを活用できた。 2. セキュリティ上の重大インシデントを発生させることがなかった。 3. BYADの授業内設定支援をし、BYAD、BYODの授業中利用を促進させることができた。 	<p>物価上昇に伴い、情報機器の価格や、委託業者の人件費も上昇している。必要な情報機器の絞り込み、BYAD・BYOD利用のさらなる促進や、委託業者の業務を見直すことで、情報関連予算の膨張を抑える。</p>	<p>学校が生徒・教職員に提供するハードウェア、ソフトウェア、クラウドサービスの種類が、ここ数年膨らむ一方であるため、整理する。これにより得られる予算・人員面の余裕を、新しいサービスの提供に振り向ける。</p>	A	A
生徒会	<ol style="list-style-type: none"> 1. 生徒の自治組織としての意識を持たせ、それに見合う活動を行う手助けをする。 2. 生徒たちの実情にあった活動になるように助言・指導をする。 	<p>1.本来のやるべき活動をしっかりと行い、本部役員としての責務を果たす。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 新入生歓迎会を昨年と同様に実施することができた。 2. 「七夕祭」の企画実施。 3. 応援指導委員会主導による野球応援を実施した。昨年に続き、本校生徒・保護者にも来場してもらい、応援を行うことができた。 4. 文化祭企画「生徒会相談室」「応援ステージ」を実施した。 5. 「正月祭」はケヤキの植樹祭と日程が重なってしまい、おみくじだけの簡易開催とした。 6. 「卒業生を送る会」の企画実施。θ館（1部）、150番教室（2部）の2部構成とした。 7. 女子トイレ生理用品設置は想定通りにはいかず、中止することにした。 8. コンタクトレンズの空容器の回収を開始した。 	<p>引き続き、本部役員と生徒とのコミュニケーションを活発にし、生徒全体の自治意識を高めていくことが課題である。また、各委員会からの企画書にも不備が目立ち、何度も再提出することになったものもあった。イベントの企画、実施で手一杯で、代表委員会はほとんど実施されなかった。</p>	<p>一般生徒からの声を吸い上げ、改革していこうという意識は感じられるが、企画書や要望書はきちんと感が得られておらず、動きも遅い。部活動や習い事の合間に活動している現状では、なかなか生徒会活動に時間が取れない生徒が多いのが問題であると感じる。学校が置かれている現状、環境を認識し、議論した上で、問題に取り組み活動することが課題である。</p>	A	B
図書	<p>生徒たちにとってより利用しやすい図書室を司書の方々と協力して運営する</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 図書委員の生徒を中心に、図書室での作業・お勧め図書の紹介などを行ない、開かれた図書室作りをしていく。 2. 図書室ニュースや図書室内の掲示を利用して、生徒達の図書室利用をうながしていく。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 生徒の興味のある本、司書・教員の視点での読んでほしい本などを積極的に選定し、それぞれ推薦文を書いてもらい、図書室ニュースに掲載した。 2. 生徒の図書委員会ではおすすめの図書の紹介、スタンプラリーの企画・カードの作成などの活動を継続して行なった。文化祭ではおすすめの図書の紹介コーナーや図書室での作業体験コーナーを設けた。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. より多くの生徒に利用してもらえる図書室作りを目指していく。 2. 大学メディアセンターの利用マナーを徹底していく。 3. 図書室ニュースの定期的な発行を目指していく。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 増え続ける蔵書の問題を解決し、書籍だけでなく、映像資料のさらなる充実をはかっていきたい。学年間の利用頻度の差を縮めていく方法を考えていきたい。 2. 大学メディアセンターの利用が減ってきているので、6年生の論文実習などでの利用数が増えるよう啓蒙活動をしていきたい。 3. 委員の人数は年々増加傾向にあるが、一方で図書室での作業への参加率は低下している。この状況の改善を図っていきたい。 	B	B

論文実習	<p>生徒が教員の支援のもとで学術論文を適切に執筆できるようにする（委員会として生徒に育みたい目標は以下の通り）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先行研究に示される見解や主張を整理し、批判的な検討を通じて意義のある問いを作り出すことができる。 ・情報の妥当性や信頼性を吟味し、他者の意見を踏まえつつ、自他を明確に区別して自らの論文内容を発展させることができる。 ・自らの思考を適切な論理展開で表現することができる。 ・学術論文としての形式や体裁を整えて執筆することができる。 	<p>科目「論文実習 1」「論文実習 2」を各 2 時間ずつ行う。また「論文実習 3」を通じて個別に生徒へ支援を行う。</p> <p>①全体</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先行研究の収集方法や、研究倫理を講義する（剽窃の問題や生成 AI の取り扱いを含む）。 ・「論文の内容」に関するループリックを配布し、目標と評価について生徒と共有する。 <p>②論文実習 1 (I 類 HR クラス単位でスタッフによる授業を行う)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テキスト『論文事始』をもとに講義を行い、論文を作成するための姿勢や技能を育む。 ・1 学期は生徒に自身の研究の中間発表を行わせ、「問い」「仮説」、それを結びつける「アプローチ」の内容を確認し、適切に示唆を与える。 ・2 学期はスタッフによる口頭試問を行い、各生徒の「争点」「判断」「論証」の内容を確認し、適切に示唆を与える。 <p>③論文実習 2(担当者別のクラス。授業は 2 クラス合同で行う)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料収集、プレゼンテーションのレジュメ確認、執筆にあたってのアドバイスなどの個別指導を行う。 ・下書きの査読を通じて、剽窃や形式のチェックを行う。 ・論文提出後に、生徒に自身の研究についてスライドを用いた研究発表を行わせる。 <p>④論文実習 3 (担当者別)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・如上「論文実習 2」の内容を基本に、個別指導を通じて適切に示唆を与える。 	<p>①全体</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ループリックの配布により、指導と評価の一体化を図ることができた。 <p>②論文実習 1</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2 学期の内容を口頭試問に変更することで、より綿密な指導を行うことができた。 <p>③論文実習 2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論文執筆、担当教員による面談や指導を授業時間内で実施し、生徒負担の軽減と指導の充実化を行った。 ・研究発表の内容と時間の適正化を行い、生徒負担を軽減するとともに担当教員によるフィードバックを適切に行うことができた。 <p>④論文実習 3</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の負担を考慮しつつ、適切に実施することができた。 <p>⑤各校との交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早稲田大学本庄高等学院とは今年度も相互に生徒を派遣して発表、交流する機会を持つことができた。 ・今年度より中央大学附属高等学校主催の Chufu Research Festival（英語による科学発表会）に生徒を派遣し、発表する機会を持つことができた。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. スタッフおよび担当教員間の指導方法・内容の共有を行い、指導の充実を図る。 2. スタッフおよび担当教員が自身の研究能力・指導能力の向上を行える状況を整備する。 3. 生徒に対する学術論文執筆に関する基礎知識の指導を向上させ、初期段階でのつまづきを防止する。 4. テキスト『論文事始』の改訂も視野に入れ、指導事項の適正化、充実化を狙う。 5. 生徒同士が協働的な学びを行える機会を創出する。 6. 他校の探究的な学びに関する取り組みを参考にし、本校の「論文実習」が陳腐化しないように今後も改善を繰り返す。 	<p>スタッフおよび担当教員の指導方法と内容の共有は継続して行う必要がある。生徒が受ける教育内容に（教員ごとの個性が発生するのは当然だが）格差が生じる状況は好ましいとは言えない。また、教員自身の研究能力や指導能力の向上を行う状況整備も今後の課題であろう。教員自身の学術的な知見や能力は時代に先立って中長期的にアップデートする必要がある。</p> <p>生徒の研究手法について、本年度は生成 AI につき、先行研究の収集や文献の翻訳を目的とした利用を中心としたが、今後どのような利用を認可するか、促していくかは再検討する必要がある。また、現状文献調査が基本となっているが、フィールドワークやアンケート調査等、今後取り入れるかどうか検討していく必要がある。</p> <p>カリキュラム全体にかかわる問題として、II 類も含めた全員に研究を課すか（別途探究的な活動を行うのか含め）、4・5 年時からスタートすることが可能か（例えば論文実習基礎）などについても議論が必要である。</p>	A	A
国際交流	<ol style="list-style-type: none"> 1. 既存の短期プログラムの整理とスムーズな運営。 2. 各短期プログラムをもっとわかりやすく提示し、短期留学プログラムの参加希望者を増やす 3. シンガポール留学が復活したので今後も継続、発展していけるようにする。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 各短期プログラムをまとめて同時募集をする。募集前に全てのプログラムの内容を記載、提示した配布物を全校生徒に配布する。 2. 英国 Bexley 交換留学プログラムを中 3 から応募可能とし、期末試験に被らないように日程調整をした。 3. 今年度の訪問時にシンガポールの学校に今後の展望や希望を話し合ってくる 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 各短期プログラムをまとめて春と秋の 2 回の募集とした結果、全プログラム応募者が増えて秋募集のプログラムでは、参加者の再募集をする必要がなくなった。 2. 昨年はシンガポールの男子校に男女ともに授業に参加させてもらっていたが、交渉の結果、本年度から女子生徒は女子校の授業にも参加できるようになった。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 引き続きわかりやすく短期留学プログラムを提示し応募者を増やしていきたい。また学校間での交換留学でしか得られない経験を伝えていきたい。 2. シンガポール留学の人数を増やし、再来年に女子寮が完成したら、男子校、女子校の両方への交流を始めるべく、準備を始めたい。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 渡航先での生徒の安全面を確保するため、引率者の負担が大きい。通信手段や引率者の増員など今後もサポート体制を充実させていきたい。 2. 男子の応募者が減ってきているので、引き続き原因を探り、対応策を検討したい。 3. 受け入れのない短期留学にはやはり応募者が多いので、今後も検討していきたい。 	B	B
施設	<ol style="list-style-type: none"> 1. 生徒の安全を第一として、基本的な施設・設備の充実を念頭に置き、計画・整備を実行する。 2. 経年劣化による施設・設備の改修事案について適宜対応する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. グラウンドの整備と有効活用を進める。 2. 中庭のケヤキの老朽化に伴い伐採を実施する。 3. 西校舎教室のホワイトボードを入れ替える。 4. 3 体ステージのネットハンドルを新調する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 芹沢球技場の完成後、主にソフトボール部の活動場所として運用されている。 2. 12 月に中庭のケヤキを伐採した。 3. 西校舎教室のホワイトボードの入れ替えを完了した。 4. 3 体ステージのネットハンドルを今年度中に新調する予定である。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 第 3 体育館の雨漏りについては経過観察を継続する。 2. 南校舎ロッカーの鍵をダイヤルロックに変更する。 3. 経年劣化による備品の交換、校内施設における改修箇所の集約、改修計画および工事を実施する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 既存施設の経年劣化と老朽化が進行しているため、中高・大学管財部・三田管財部など関係部署と連携をとりながら、優先順位をつけて計画的な対応を進める。 2. カリキュラムが多様化する中、教室数が潤沢ではないため新棟建設・増設等を計画する。 3. 気候変動に準じ、一年を通じて快適な環境で学習活動ができるよう空調設備を整える。 4. 太陽光パネルを設置するなど、使用電力を極力校内でまかなえるようにする。 	A	A

BLS	<ol style="list-style-type: none"> 1. 救助の実践を通して、緊急事態の判断、危機管理、生命の尊厳、市民の義務を根付かせる 2. 3年以内の再履修で実行能力の低下を防ぐ 3. ボランティア精神の育成 4. 教職員の受講率の向上 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 指導員の指示に従い技術習得に励む。 2. 講習後、慶應 BLS 教育の取り組みについて説明にあわせ、校舎内に設置してある AED の場所を確認する。 	<p>昨年度に引き続き、藤沢市消防局および藤沢市救急救命普及推進会の多大なる協力を得て、第3体育館にて学年全体での実技演習を実施することができた。機材も十分に確保されており、生徒一人ひとりが主体的に実技に臨める環境が整っていた。今年度より、指導効率化の観点から班編成の人数制限が厳格化され、クラスをまたいだ班構成となった。運用面に懸念はあったものの、生徒たちは混乱することなく円滑に活動できており、協力体制の質の高さが伺えた。一方で、昨年度からの課題であった教職員への受講アナウンスについては、今年度も実施に至らなかった。また、実施時期が7月の繁忙期と重なり、消防局の予約確保に苦慮した点については、次年度に向けて計画段階からの見直しが必要である。</p>	<p>1.安全と実施率の両立 適切な感染症対策を講じた上で、班編成やタイムスケジュールの最適化を図り、実技演習の実施率を最大限に高められる体制を構築する。</p> <p>2.校内体制の整備（教職員受講） 教職員の受講率向上が喫緊の課題である。行事予定の編成時に優先的に枠組みを設定するなど、組織として受講しやすいスケジュール管理を徹底したい。</p> <p>3.計画的な予約管理 例年7月の講習予約は混雑が予想されるため、次年度は早期に消防局との連絡調整を開始し、希望時期に確実に実施できるよう計画性を高める。</p>	この活動は、続けていくことに意義があり、塾生塾員誰もが、手をさしのべられる環境を目指す。	B	B
年会誌	年会誌発行の期日の円滑化、及び正確さを向上させる	各担当部署からの原稿について、進捗の確認・とりまとめを行う。 ・行事ごとに原稿の依頼をする ・校正は年会誌担任のみならず、各クラス担任・クラブ顧問にも依頼する	実施できた行事については積極的に記録として残すようにした。	締切の遵守や提出された記事の内容等、依然として不備が見られることも散発するところである。引き続き、丁寧な確認、呼びかけを実施する。	生徒の探究的な取り組みによる成果物についてより充実した記録がなされていることを目指す。	B	B
クラブ運営	生徒が安全かつ有意義にクラブ活動ができるよう、環境および制度を整備する	<ol style="list-style-type: none"> 1. 各活動場所における危険箇所を調査し、安全に活動できる活動環境を整備する。 2. 熱中症予防などの安全対策を講じる。 3. 安全でスムーズなクラブ紹介を実施する。 4. 監督・コーチへの本校クラブ事情への理解を促し、より一層の協力を得る。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 前年度に続き、危険箇所を調査したが、備品の整備とグラウンド使用の過密状態による危険性が指摘された。備品の整備については、ほぼ対応できた。 また、グラウンドについても、芹沢球技場の使用が始まったため、第1グラウンドの過密状況が緩和された。 2. 夏季における炎天下での部活動の制限などの対策を実施した結果、熱中症での病院搬送は、出なかった。 3. クラブ紹介パンフレット、ポスター掲示、各クラブの紹介動画(学年ごとに適宜視聴)によりクラブ紹介等実施した。また、希望があった場合、中庭にて部活動の実演を行った。 4. 9月に「監督・コーチの会」を実施し、資料の配布と説明を実施した。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 来年度以降も、施設不足解消に向けた努力は引き続き行う必要がある。特にグラウンドは厳しい状況である。 2. 数年来の課題である、教員の負担軽減を目的としたペーパーレス化だが、今年度は、あまり検討ができなかった。クラブ活動・遠征等許可願や公欠届などをどうするかについては検討を継続したい。 3. 夏季の昼間の時間帯は、ほぼ毎日、暑さ指数が危険になる。その場合、運動部の活動は「原則」禁止とした。ただし、活動に関して統一したルールを決めずに、各クラブごとに柔軟な対応をお願いした。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 安全性を高める対策、特に夏季の運動部の活動については、検討と改善を継続する。 2. 生徒の活動に影響がないように教員負担を軽減する。義塾の「臨時職員制度」を有効活用し普及をより促進したい。今年度は各クラブ、最大30回までとしたが、拡大する方向で検討したい。 3. 電子署名を利用することで、紙の書類を大幅に減らす事を検討すべきである。 4. 活動場所の安全問題について、最も深刻な問題は、グラウンドの過密利用についてである。引き続き、外部施設の確保について強く要望をしていく。 	A	A

<p>広報</p>	<p>本校の広報に関わる業務の改良を目指して実施計画・企画・実施・評価・報告をする</p>	<ol style="list-style-type: none"> 外部団体主催の説明会へ参加する。 学校主催の見学会のスムーズな運営を行う。 学校紹介には以下のものを有効に活用する。 <ul style="list-style-type: none"> 学校案内リーフレット 再構成版 Web サイト（引き続き改良に努める） 学校紹介ビデオリニューアル版 生徒による学校紹介動画を活用する。 	<ol style="list-style-type: none"> 4/29（祝） 神奈川私立中学相談会 7/5（土） JOBA「学校フェア」（オンライン） 7/27（日）早稲田アカデミー・首都圏模試センター共催（海外子女教育振興財団協力） 帰国生対象学校説明会・個別相談会 オンライン開催（一定期間視聴可能なオンデマンド配信）と、オンライン併用の対面開催（mirai compass による事前申し込み・定員制の校舎見学会）を組み合わせ、以下の日程（すべて 150 番教室）で実施した。また昨年度から録画ではなく生徒に生で学校生活の紹介を発表してもらっている。 7/12(土) 中帰国・高午後 7/26(土) 中一般・高終日 9/13(土) 中のみ終日 見学会参加者に対し、各家庭にリーフレットを 1 部を配布した。また、希望者には昨年度の入試問題を持ち帰れるように会場内に設置した。 Web サイトについては、「在校生の声」の追加 1 名（6 年男子・横浜初等部）を選出した。取材は 2026 年度 4 月～5 月頃に実施する予定。 公募した、生徒による学校 紹介動画を 2024 年度から活用している。 公式学校紹介ビデオはマスク着用になっているシーンを中心に撮り直し、新しいものを撮影した。2026 年度からは新版を活用予定。 	<ol style="list-style-type: none"> 見学会当日の生徒に生で学校紹介を発表してもらいながら、引き続きオンライン併用の対面開催（予約・定員制）で実施する方向で考えたい。 また、昨年度の結果を受け、今年度は、文化祭直前の見学会をやめ、回数を減らしたが、累積参加数の差は無かった。 入試形態別の参加数のみならず、学年別の参加数を見ていくことで、引き続き、実施時期や実施回数、申し込み締切り時期と条件設定などの改善・検討が必要である。 暑さ対策のため、入場前の待機場所にミスト散水をおこなっていたが、見学会の時的に、暑さが厳し過ぎて、ほとんど効果が無いため、待機教室を作成した。次年度に向けては待機教室を含めたスムーズな運営がおこなわれるようにしたい。 Web サイト「在校生の声」の追加に併せて、今年度見合わせた部分的修正を引き続き行うと同時に、クラブ活動・学校行事以外の項目におけるトップニュース掲載基準を検討する。 また、学校案内リーフレットについては、SDGs の観点からも Web サイト内の学校案内（リーフレット電子版）の併用を意識的に目指すことを継続する。義塾の Web サイトのリニューアルに合わせて、本校の Web サイトがどこまでデザインなどの面で体裁を合わせていくかを検討していく必要がある。 	<p>生徒の学校生活のリアルをどのように発信していくのか（もしくは発信しないのか）、学校の方針を確認、共有した上での広報活動を考える必要がある。</p> <p>・横浜初等部受け入れ後の教育目標・教育内容を発信し、学校の良さがわかるように学校内外への広報体制を充実させなければいけない。</p> <p>たとえば、現在見学会時に配付している学校案内リーフレットや見学場所案内などを、タブレットやスマートフォンから QR コード読み取りによってアクセスできるようにするなど、紙資源の節約を図ると同時に、学校案内リーフレット電子版の活用につなげることなどが考えられる。</p>	<p>A</p>	<p>A</p>
<p>芸術鑑賞</p>	<p>人生をより豊かなものにするために質の高い芸術に接することを目的としている。 3 年間のローテーション（クラシック音楽→日本の古典芸能→ミュージカル・オペラなど）を設け、生徒が多様な芸術に接する機会を用意している。</p>	<p>実施日：2025 年 7 月 9 日(水) 演奏：神奈川フィルハーモニー管弦楽団 演目：「新世界」ほか 会場：みなとみらいホール</p>	<p>今年度はクラシック音楽鑑賞（中等部・高等部合同開催）を実施した。 第一線で活躍する指揮者・演奏者を招聘することができ、貴重で有意義な機会となった。</p>	<p>次年度は古典芸能（落語）鑑賞を予定している。</p>	<p>芸術鑑賞会・合唱コンクールともに、依然としてホールの確保が都度対応のため困難を要している。</p>	<p>A</p>	<p>A</p>
<p>自己点検</p>	<ol style="list-style-type: none"> 教科、委員会が、教育活動の内容について評価する仕組みを設け、本校の教育水準が向上し続けるための補助的手段を提供する 活動内容の重複や効率性の検証材料を提供することで、円滑な学校運営に寄与する 	<ol style="list-style-type: none"> 各年度における教科、委員会の活動内容をまとめ総括を行う。 各組織の目標設定、活動内容の評価と改善の記録が適切になされているかを確認する。 保護者の学校に対する満足度を測るために、有効なアンケート項目を設定する。自己点検で得られた情報を基に、他教科、他委員会相互の情報交換を促す。公表可能な学校評価資料を作成する。 	<p>1. 現行の評価方式による作成方法が定着し、スムーズな書類作成で予定が達成された。2018 年度より自己評価の客観性と透明性を高めることを目的とし、学校関係者評価を実施した。手順としては、保護者世話人の 37 名に本校ホームページの学校評価一覧をご覧頂き、各教科、委員会の評価が適切に行われているかの設問に 2 段階評価で回答して頂いた。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 評価書類作成の内容や作成の仕組みについて、教員の、特に年度末の他業務への影響を考えると現行の方法が最良であると考え。今後も各組織が自己点検・自己評価を材料に議論を促す仕組みを検討していく。年度間の担当者変更の際にも活用していく。 保護者から目標設定と結果の数値化を求める意見もあったが、教育活動は必ずしもデータとして目標設定、結果をすることが適切とは言えず、今後も各教科、委員会で記述式の評価と分析を継続していきたい。 	<p>文科省「学校評価ガイドライン」平成 28 年改訂で、小中一貫校における教育目標の設定などについて示されている。横浜初等部との連携の中で、学校評価に関して文科省の指針である義務教育 9 年間の目標設定に加えて、本校においてはさらに高等部 3 年間、計 12 年間の中での段階的な目標設定について議論していく。学校評価が形骸化しないような取り組みは常に必要である。</p>	<p>B</p>	<p>B</p>
<p>1 年生旅行</p>	<ol style="list-style-type: none"> 友人との共同生活を通して、他者を理解し、社会生活や集団生活でのルール・マナーを学ぶ。 野外活動などを通して、自分の役割を果たすことや仲間と協働することで友好を深める。 富士山麓の生態系や地形について、実物を見聞きし、豊かな自然に触れる。 	<ol style="list-style-type: none"> 事前学習として理科の授業で富士山について学ぶ。 樹海、紅葉台トレッキングを通して美しい自然景観やそこに息づく動植物などの観察をする。 チームビルディングを通して、目標を達成できるようなチームで協力し、メンバーのスキルや経験を最大限に活かすことで組織の力が最大化することを体験する。 	<ol style="list-style-type: none"> 各プログラム、ホールアースの丁寧な指導のお陰で、無事に遂行することができた。 前半組、後半組それぞれ充実した時間を過ごすことができた。 集団生活を通して、うまくいかないこともあったが、自分の役割を認識し、行動しようとする姿が見られた。 	<ol style="list-style-type: none"> 来年度は、旅行業者が変更となり、宿泊施設も変わるため、良いプログラムになるよう、事前指導の段階から計画的に進めていきたい。 今年度は、食事のアレルギー対応は学校側で情報を集約したため、連絡が旅行業者、ホテル、食事場所間でうまく連携できた。 	<p>1. 来年度は新しい行程となるが、雨天時の代替プログラムの充実は引き続き課題である。</p>	<p>B</p>	<p>B</p>

		4. 飯盒炊さんを通して、仲間意識を高め、集団の中の自分の役割について学ぶ。					
2年生旅行	<ol style="list-style-type: none"> 1. 東北地方の自然・歴史・文学・風土を学ぶ 2. 集団行動の意義を理解する 3. 防災学習・復興支援プログラムに取り組む 4. 現地の方々との交流を通じて地域文化の豊かさを実感する 5. クラスや学年内のコミュニケーションを深め、新しい仲間をつくる 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 1班は月火水木、2班を火水木金の行程とし、宿泊地を花巻1泊、田老1泊、盛岡1泊とする。 2. 平泉、花巻、遠野、三陸鉄道、東日本大震災について事前学習を行う。 3. 国語科での学びと見学地をリンクさせる。 4. 郷土芸能や郷土料理等を通して郷土文化への理解を深めさせる。 5. 各教科で学習した内容に触れさせる見学地や体験プログラムを用意する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. アレルギー対応について、旅行会社が各施設に事前に共有していただいたアレルギー対応の情報と、現地での対応に食い違いがあった。 2. 行程通り終えることができた。 3. 集団行動での基本となるようなことを確認し、仲間との親睦を深めることができた修学旅行となった。 4. 事前学習で学んだ『奥の細道』・宮沢賢治・『遠野物語』について、作品の舞台となった平泉、花巻、遠野を実際に訪れることで、各訪問地に関する理解をより深めることができた。 5. 2日目の震災学習列車乗車、3日目の田老地区での震災遺構見学で有意義な震災学習となった。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 今年度は、花巻1泊、田老1泊、盛岡1泊の形とした。 2. 旅行会社から送られてきた各施設のアレルギー対応や新幹線に関する情報に不備が多く、多くの教員で確認する必要がある。 3. 2日目の朝食にセルフ対応のメニューが含まれているということが事前に周知されておらず、小麦アレルギーの生徒がコーンスープを食べてしまうということがあった。大事に至らなかったとはいえ、事前によく確認する必要がある。 4. 昨年度2泊目に宿泊した施設は温泉施設で教員の指導が難しい形状であったため、本年度は羅賀荘に変更した。しかし、羅賀荘も同様に温泉施設の形状に問題があり、指導が難しかった。2日目の宿泊施設の変更にもとない、3日目の昼食会場も休暇村に変更したが、食事内容（海鮮丼）・量ともに乏しく、生徒の座席もめちゃくちゃだったため、別の施設を検討する必要がある。 5. 3日目の遊覧船で船酔いで体調が悪くなった生徒がいたが、旅行会社と連携がとれず対応に苦勞した。 	<p>すでに震災から10年以上が経過しており、これからの生徒たちは東日本大震災を体験していないことになる。そうした生徒たちへの効果的な震災学習を考えていく必要がある。</p>	A	B
3年生旅行	<ol style="list-style-type: none"> 1. 広島で平和について考え、瀬戸内および四国の歴史、文化、自然に触れる。 2. 事前学習と現地での学習を総合した学びを行う。 3. 集団の中で他者と協力し合うことを学ぶ。 4. それぞれの場でのルールを尊重し、社会の中での規律ある行動をとるよう徹底する。 	<p>【目的地】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 広島お好み村 ● 広島平和記念公園・資料館・被爆者講話 ● 厳島神社・宮島 ● 松山市内班別研修 ● 瀬戸大橋記念館・瀬戸大橋タワー ● 中野うどん学校(体験) ● 金刀比羅宮 ● 高知県立牧野植物園 / 高知城 <p>【主な事前学習】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 社会の授業：平和教育の一環として、軍拡・軍縮についてや、核兵器の現状と国際状況について学習した。また、厳島神社の歴史について学び、金毘羅宮についての映像を視聴。 2. 国語の授業：夏目漱石「坊ちゃん」や俳句について学ぶ。 3. 生物の授業：牧野植物園 生徒全員のシロツメグサのスケッチを牧野植物園に送付し、学芸員から直接助言をしていただく。 4. 牧野富太郎及び牧野植物園に関する映像視聴・高知城を知るための映像・プロジェクトX「瀬戸大橋」映像視聴 5. 松山班行動計画立案作成 6. 英語の授業“The Story of Sadako”を読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前半3クラス、後半3クラスいずれも、行程通り無事に3泊4日の旅行を実施できた。 ・広島での平和学習を通して、過去の歴史から現在の課題まで、自分事として捉えて深く考えることができた。 ・厳島神社・宮島・金刀比羅宮では、歴史的建造物としての価値を実際に見て触れることによって理解を深めることができた。 ・松山市内班別研修では、それぞれの班で計画表を立てて行動する経験を通して、集団の中で他者と協力し合う力を身につけた。また、国語で学んだ「坊ちゃん」や正岡子規の俳句について、その地域的背景までも学ぶことができた。 ・牧野植物園と高知城では、映像だけでは知ることができないバックヤードや詳しい説明を聞くことができ、生徒の興味関心を大いに引き出すことができた。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 昨年度の反省を活かし、今年度も初日に宮島内の宿に宿泊することができたため、翌日の行程に余裕を持つことができた。だが、宿泊場所については港から遠く、来年度の課題となる。 2. 金刀比羅宮では、奥社まで行く生徒を教員が把握しておいたため、スムーズに点呼を取ることができた。ホテルの奥にある金丸座についてはガイドをお願いし、有志で見学することができた。 3. 今年度は、桂浜へいくことをやめ、牧野植物園と高知城のいずれかを選択して見学するようにした。 4. 有志で千羽鶴をつくるプロジェクトがたちあがり、貞子像の前で捧げることができた。 	<p>世界で戦争や核開発が行われている中で、広島での平和学習は非常に意義深いものである。戦争を感覚的に恐ろしいものだけ捉えるのではなく、なぜ戦争がなくならないのか、どのようにしたら核兵器をこの世から廃絶することができるのかということについて考えを巡らせ、自分事として捉えて学ぶことが重要である。また、四国3県を巡る旅行は、充実した内容になっているものの、その地域に根差した食材や生活文化などを学ぶことはできていないため、今後もより良い内容を検討していく必要がある。</p> <p>今年度は2学期に帰国する生徒が多く、事前学習が十分にできないままであった。また、アレルギーへの対応が煩雑であったため、今後も対応の工夫が必要である。また、原爆記念資料館や厳島神社ではかなりの混雑が見られ、見学時間をずらすなどの対策がもとめられる。</p>	A	A

4年生旅行	<ol style="list-style-type: none"> 北陸を軸とした中部地方の各地を地学、地理学、民俗学的な視点で観察し、地域の自然と人々の暮らしの関わりについて学ぶ 事前学習と現地での見学を総合し、自発的に探究する 集団生活を通して、協調性や規律性を身につける 	<p>・事前学習</p> <ol style="list-style-type: none"> 特別カリキュラム期間中に地学・地理学的な視点で授業をおこなう。 「石川の工芸」「石川の歴史・文化」について、出発前にオンラインで現地専門家による講演をおこなう。 見学地に関係した用語を挙げ、そのうちの事前学習で学びたい用語について各自1つを選んでA4一枚のレポートを作成する。 <p>・事後学習</p> <p>事前学習と現地での見学を総合したレポートを作成する。内容は、各自が設定したリサーチクエストに沿ったものとし、その構成は、以下が明記されたものとする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 見学地についての疑問 現地を訪問して得た情報 旅行後に調べたわかった情報 1に書いた疑問に対する、現時点での答え 参考文献 	<p>2024年度は、9月からの復学者への対応に苦慮したとの報告があったため、4月から各家庭との連絡を事前に取りを意識したため、復学者のアレルギー調査などについては、大きな問題なくおこなうことができた。いずれにしても、旅行期間のすべての食事について、食事を提供する施設や業者からメニューと成分表を受け取り、食物アレルギーがある生徒全員に代替メニューの必要の有無を確認。代替メニューが必要な生徒については、改めて対応後のメニュー、成分表を対象生徒に確認する作業を行った。</p> <p>【事前学習からつながる現地見学地】</p> <ol style="list-style-type: none"> 『フォッサマグナミュージアム』、『立山カルデラ砂防博物館』、『弥陀ヶ原』、『小谷露頭』、『イタイイタイ病資料館』、『年縞博物館』、『永平寺』を選択して訪れ、地理学・地学的な理解を深めることができた。 『白川郷』『妙立寺』『兼六園』を訪れることで、民俗学的な理解を深めることができた。 2025年度は、県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館の休館日に当たり見学ができなかったが、保存会ガイドの説明は遺跡見学だけでも非常に充実しており、2026年度は博物館の見学も加わるので、更に期待できる。 	<p>引き続き、事前学習も含めて、北陸を軸とした中部地方の各地を地学・地理学・民俗学的な視点で観察し、地域の自然と人々の暮らしの関わりについて学ぶことを考えている。</p>	<p>基本的に4年生の事前事後学習も含む旅行内容は完成度が高いと考えている。しかし、現行の目的にとらわれず、宿泊地や見学地の検討の継続は必要である。また、荒天時のリスクに加え、近年感染症流行のリスクやアレルギー対応の増加なども加わり、考慮すべき要素が煩雑になり、業務量が肥大化しているため、教員が対応しきれなくなっている感もある。全学年が、毎年、同時期に旅行を実施すべきなのかどうか、検討すべき時が来ていると感じる。</p>	B	A
5年生旅行	<ol style="list-style-type: none"> 国際化が進む昨今、古くからの歴史や文化をもつ京都・奈良は日本人として一度は訪れるべき場所であり、事前学習や訪問を通じて数多く残されている史跡や文化財からその歴史と文化を直に体験・拝観し、継承への取り組みを学ぶ 班別研修により、仲間との協調性や自主独立の精神を養う 	<ol style="list-style-type: none"> 今年度は以下の4ヶ所に班毎に分かれて伝統工芸の体験学習を行う <ol style="list-style-type: none"> ①陶房みやもと（清水焼作り体験） ②今井半念珠店（念珠作り体験） ③安達くみひも館（くみひも作り体験） ④光峯錦織工房（平織機織体験） 事前学習として、京都（1日半）および奈良（半日）について、班別で行動計画表を事前に作成し、班ごとに計画表に沿って研修を行う 行程で数少ないクラス行動で仲間との交流を深めるとともに、『石舞台』『長谷寺』を訪れ、現地ガイドの説明により歴史的な理解を深める 歴史ある奈良ホテルにてテーブルマナーを学ぶ 訪れた場所の中から自分でテーマを決め、深く考察・調べて事後学習のレポートを作成する 	<ol style="list-style-type: none"> 伝統工芸の体験学習は、概ね無事に終了することができた。伝統工芸学習の内容としては充実しており、生徒たちも古くから守られてきた文化に対して誠実に向き合うことができた。 行動計画表の作成については、夏休み前から班毎に試行錯誤を重ねまとめることができた。当日の研修については概ね計画通り実施することができた 事後学習のレポートでは、実際に訪れたことで得た知見を基に、疑問を深掘りし考察した内容を一定の形でアウトプットし、自主研修における学習成果をまとめることができた。 	<ol style="list-style-type: none"> インバウンドの影響により、京都市内の交通機関での移動は計画通りにいかず、拝観や見学時間を短縮しなければならない班がいくつかあった。また見学・拝観場所についても外国人観光客により大混雑しており、班別研修の行き先は、混雑状況を考慮した上で行程を決定した方が良い。 伝統工芸の体験学習は、昨年度の体験内容を精査し5カ所提供したが、今年度の生徒が選択しなかった川面美術研究所の「重要文化財修復」は非常に良いプログラムのため継続させたい。 	<ol style="list-style-type: none"> 京都での体験学習の充実 オーバーツーリズムの影響により、公共交通機関や見学・拝観・食事場所の混雑が深刻化している。引き続き、伝統工芸の体験学習については、行先や学習内容、行程のどこに組み込むかについては再検討する必要がある。 また、以前は貸し切りバスによる移動のコストが課題となっていたが、公共交通機関利用の時間的コストが膨らんでいるため、班別研修とコース別研修の配分も含め検討が必要である。 奈良コースの設定 歴史ある神社仏閣が各地に点在しているが、それぞれへの移動にかかる時間的コストに対して、班別研修時間が短いことが課題である。京都での体験学習のようなコースの設定を、奈良中部への研修内容と併せて検討すべきである。 	B	B

6年生旅行	<p>1.多角的な知見の習得と自律心の育成</p> <p>北海道の歴史・文化、および環境問題等の現代社会的事象を多角的に考察し、体験を通して理解を深める。また、班別自主研修を軸とすることで、集団の中での協調性を養うとともに、自律して行動する精神を育む。</p> <p>2.「総合的な探究の時間」との有機的な連携</p> <p>単なる観光に留まらず、「総合的な探究の時間」の一環として位置づける。事前学習での仮説立てから、現地での調査、事後のリサーチ発表までを一貫したプロセスとし、深い学びの実現を目標とする。</p> <p>3.教育旅行としての独自性の追求</p> <p>個人旅行では困難な、大自然の中でのフィールドワークや専門家との交流を行程に組み込む。実体験を伴う学習機会を提供することで、自然との共生や教育的価値を重視したプログラムを展開する。</p>	<p>1.実施規模と目的の適正化</p> <p>昨年度はコロナ禍による制限への配慮から特例として4泊5日で実施したが、今年度は3泊4日の行程へと回帰した。期間は短縮されるものの、北海道の歴史・文化・現代社会を多角的に学ぶという主眼に変わりはなく、自主研修を通じた協調性と自律精神の育成を柱として実施する。</p> <p>2.事後学習による学びの可視化</p> <p>今年度の学習活動においては、現地での体験や調査に基づき、生徒一人ひとりが「北海道新聞」を作成・提出することとする。北海道の歴史や都市構造といった社会科学的視点、あるいは生態系や火山活動などの自然科学的視点から、各自が関心を持ったテーマを深く考察し、アウトプットを行うことで、学びの定着を図る。</p> <p>3.自主研修における計画性の向上</p> <p>班別自主研修の充実に向け、事前の計画策定を徹底させる。単なる行き先の決定に留まらず、目的地間の所要時間や必要経費を精査した詳細な計画表を作成・提出させることで、当日の円滑な行動のみならず、限られた時間や資源を有効に活用する実践的な管理能力を養う。</p> <p>4.教育的価値の追求（行程の最適化）</p> <p>事前に現地の下見を実施し、旅行会社との綿密な協議を重ねる。個人旅行では得られない教育的知見が得られるよう、訪問地や体験プログラムを厳選することで、教育旅行としての質を一層高める行程を実現する。</p>	<p>1.実施規模と目的の達成状況</p> <p>昨年度の特例（4泊5日）から本来の3泊4日へと行程を戻して実施したが、各見学地での滞在時間を精査したことで、密度の高い学習を実現できた。北海道の歴史・文化に対する理解を深めるとともに、全行程を通じて生徒の主体的な行動が目立ち、協調性と自律精神を養うという当初の目的を十分に達成することができた。</p> <p>2.事後学習を通じた知見の深化</p> <p>帰着後、生徒一人ひとりが「北海道新聞」の作成に取り組んだ。各自が設定したテーマ（社会科学的視点や自然科学的視点）に基づき、現地での実体験や収集した資料を多角的に考察した跡が見られた。単なる感想文に留まらない、アウトプットを前提とした深い学びの定着が確認できた。</p> <p>3.事前計画による円滑な自主研修の遂行</p> <p>事前に「所要時間」や「経費」まで精査した詳細な計画表を作成させた成果として、当日の班別自主研修は極めて円滑に進行した。限られた時間と資源を自分たちでマネジメントする経験は、生徒にとって実践的な管理能力を養う貴重な機会となり、大きな混乱もなく全班が予定通りに行程を完了した。</p> <p>4.厳選された行程による教育的成果</p> <p>下見に基づき旅行会社と厳選したプログラムは、個人旅行では得がたい専門的な知見を生徒に提供した。自然景観の鑑賞のみならず、その背景にある歴史や生態系を深く学ぶ行程としたことで、教育旅行としての質を担保し、生徒の知的好奇心を大いに刺激する結果となった。</p> <p>5.その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行程中に体調不良者が数名出てしまったが、教員や看護師が対応にあたり、保護者も適切に対応してくださった。 ・アレルギーに対して重篤な症状を起こす可能性のある生徒がいたが、十分に注意を払っていたためアレルギー反応が出た生徒はひとりもいなかった。 ・利用したバス会社がとても良かった。 ・昨年度の反省を活かし、食事を充実した内容にすることができた。 ・旅行会社の対応は良かった。 	<p>1.安全・健康管理体制のさらなる強化</p> <p>今年度、数名の体調不良者に対し看護師や保護者との連携で迅速に対応できた経験を活かし、次年度も事前の健康調査と教職員間での情報共有を徹底する。特にアレルギー対応については、今年度の「発症者ゼロ」という実績を維持するため、旅行会社および各施設との詳細な確認作業を標準化し、安全確保に万全を期す。</p> <p>2.探究学習の質の維持と成果の共有</p> <p>「北海道新聞」の作成が、単なる記録に留まらない深い考察に繋がったことを評価し、次年度もこの枠組みを継続する。今後は、優れた作品を学年内で共有する場（展示や発表会など）を設けることで、生徒相互の刺激と、より多角的な視点の獲得を促す仕組みを検討したい。</p> <p>3.自主研修に向けた事前指導のブラッシュアップ</p> <p>今年度、詳細な計画表（所要時間・経費等）の作成が円滑な運営に直結したため、この指導手法を定着させる。次年度はさらに、デジタルツール（地図アプリや家計管理表等）の活用を視野に入れ、より現代的かつ精緻なマネジメント能力を養う指導へと発展させる。</p> <p>4.満足度の高い学習・生活環境の維持</p> <p>今年度、食事内容の改善や良質なバス会社の選定により、生徒の満足度と学習効率が向上した。この実績に基づき、次年度以降も「教育旅行としての質」と「生徒の健康・活力」を両立させるべく、下見を通じた厳選な施設選定と、信頼できる旅行会社との緊密なパートナーシップを維持・継続していく。</p>	<p>1.現状の課題と学習効果の検証</p> <p>最終学年における「総合的な探究の時間」の集大成として、現在の北海道コースが最適な学びの場となっているか、抜本的な再検討が必要である。現状、自然科学や社会科学といった多角的な観点からの学習機会は一定数確保されているものの、他学年の学習内容と比較して本学年独自の深い課題設定が困難であるという課題が顕在化している。</p> <p>2.北海道コースにおける行程の再編成</p> <p>仮に次年度以降も北海道を研修地とする場合、現在の行程を大幅に見直す必要がある。特に、長距離のバス移動による時間的ロスが学習機会を圧迫している点は大きな懸念材料である。この解消に向け、移動効率を重視した都市型研修へのシフト、あるいは、かつて実施していた「道東方面」のように、自然科学の学習に主眼を置いた専門性の高いコースの復活など、移動コストに見合う学習密度の担保を検討すべきである。</p>	A	A
-------	--	---	--	---	--	---	---

<p>未来の学校検討委員会</p>	<p>1. 本校の目的の再定義 開校 30 年を経て、教育目的である「社会的責任を自覚し、知性、感性、体力にバランスの取れた教養人の育成」という言葉の内容を現代の視点で整理。 社会的責任: 社会の先導者としての貢献と、全体の発展を考える姿勢。 知性: 忖度せず、自らの教養・知識を繋ぎ合わせて判断する力。 教養: 幅広い分野における知識、それらによって生み出される心の豊かさ、品格。知識に加え、それを繋ぎ合わせる構想力、新たなものを生み出す発想力・創造力。</p> <p>2. 社会と接続する「体験型」教育の柱 生徒が社会と直接触れ、自ら行動するための 3 つの具体的な提案。 卒業生や教員の人脉を活用した職場体験。縦の交流を兼ねた発表の場も構築。 非営利団体等での活動を通じ、社会的責任の自覚を促す（主に中等部）。 高大連携プログラムや 6 年選択科目での大学キャンパス活用。</p> <p>3. 教育プログラムの拡充と今後の課題 地域との連携、および地球市民教育（SDGs）の実施。 本物に触れる学びとして、実地研修や、社会起業・プロジェクト体験の重視。</p> <p>運営上の課題や新しい取り組みの導入に伴う「業務削減」の必要性（継続検討事項）。</p>	<p>2025 年度の会議 2023 年度、2024 年度の議論を踏まえ、その詳細をテーマ別に議論した。 1 学期（テーマ別座談会）、2 学期（学校の特色別座談会） オープン: 議題を事前に提示し、誰でも参加可能な「委員会会議日ではない日」の設定を推進した。 段階的な議論: 1 学期は昨年度の結果に基づくテーマ別座談会（2024 年度までの会議で出た項目を重点化）、2 学期は学校の 4 つの特色に特化した座談会（学校が掲げる育成したい力を中核とした項目に重点化）。</p> <p>5/12：生徒像・学校像 6/2：授業・カリキュラム・総合的な探究の時間 6/9：学校行事・施設 6/16：課外活動 6/23：教職員関連（姿勢、働き方） 10/20：データサイエンス 10/27：第二外国語教育 11/5：国際交流 11/17：英語教育 12/15：初等部との接続</p>	<p>2025 年度の論点整理 2025 年度の会議での議論を経て、5 つの観点で議論内容を再整理した。社会的責任を自覚し、知性・感性・体力にバランスのとれた「厚みのある教養人」の育成を基本とすることも確認した。</p> <p>1. 学校の根幹 ①継承・重視すべき点 ②変化・発展が求められる点 2. 授業・カリキュラム 3. 行事 4. 課外活動 5. 学校や職場の環境</p>	<p>今年度は昨年度の反省を活かし、全てオープンな場での議論を行った。次年度についても、オープンな形での委員会を継続していく必要がある。 新学習指導要領の答申等を踏まえながら、教員たちから出てきた意見を委員会メンバーで集約しつつ、本校における新たな教育の柱・アイディアの案の具体を提案する。</p>	<p>昨年度に引き続き、常に 5 年先・10 年先を見据えて、生徒を取り巻く状況の変化に応じ、新たな授業や探究活動を提案・実施していく。 しかし、限られた人的リソースで実施可能な教育活動には限界があるので、クラブ活動や学校行事の再検討・削減のみではなく、将来的にはカリキュラムの再編成についても検討していく必要がある。今後はカリキュラム検討委員会へ引き継ぐための素材作りを行っていく。</p>	<p>A</p>	<p>A</p>
-------------------	--	---	--	---	--	----------	----------